

逸史譯本

九

| | | | |
|-----|---|---|---|
| 和書門 | | | |
| 二 | 八 | 〇 | 類 |
| 一 | 〇 | 〇 | 函 |
| 一 | 〇 | 〇 | 冊 |

| | | | |
|------|---|---|----|
| 內閣文庫 | | | 和書 |
| 二 | 八 | 〇 | 類 |
| 一 | 〇 | 〇 | 函 |
| 一 | 〇 | 〇 | 冊 |

| | |
|------|----------|
| 內閣文庫 | |
| 番號 | 和 28410 |
| 冊數 | 12 (9) |
| 函號 | 150 35 |



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



竹山逸史卷之九

目録

一上杉謀反の事

一大君東國南進發の事

一石田三成謀反の事

一伏見落城の事

一東國の形勢上方のむくみ

一政牟城攻の事

一関ヶ原合戦の事



慶長五年

- 一石田以下誅せらる事 同
- 一毛利島津降参の事 同
- 一一切臣子国賜る事 同
- 一上杉降参の事 同六年
- 一二條の城まつらる事 同

竹山逸史卷之九

向陽佐々木復甫 譯

慶長五年庚子より
同六年辛巳までを記

慶長五年庚子正月上杉景勝年始の御礼の名代小
配下大森の城主藤田純登守信吉を大坂に送りいさ
大君信吉を召こし上杉黄門のとき上洛あつて天
下の事議せらるへきよしをよくりやせとて物多く
召こし直次の御刀黄金
百兩小袖廿領返さるたうある所も景勝石田
三成といふ合はる者もて東西よりわけて軍起さん
とする評定あり信吉是をあるもらる諫めし

に直江魚續の仇を讎せしめて誅せしむべしと
す也信吉大の恨て三月三日家内残らん引つて
て都の上野にほとと景勝等々密事するを察ん
大君増田長盛大谷吉隆に知らせく景勝の上洛を
せしめさせぬ病氣を中立てしむるをせん
又あるに信吉石田三成の城普請の事咎めさせ
むししうハ城まゝの者の城の普請せしむる勿論
はるとやせしう先達てより奥州出羽上野に盗
賊蜂起して是れをいかにせしむるを是を遣
捕して紅紙の書に景勝の下知書ありしを陳

ししうの生捕を東國の諸大名より大君に
送つて景勝の軍をてし起りぬと國々早馬を
まゐりせしむるに大君に捕しぬるの所をい
あふんとて伊奈圖書を合はしけりてさ上洛を
せしめ密謀をせしめしむるに景勝は由
くは中野に結句大君の誓紙をそしむる
あふし罪ありとて十ヶ条をかきりしむるを
直江山城守ハ日六の義光と交りしむるを
四月に至て義光に作せて直江に書筒をかくるを
せんしむるに中野にせしむるに直江にかくるに

惣江をかしらりして返書五月大君は返書を
不承し御氣を大損しかうきのたすしかよ上杉の志
こそなりこそ歳六十の近はまぬをといきか
うる無礼な忠状を見し事なきしさうに速に退
治せんとして諸道の大名家軍兵僅役をせしめし未
七月よりよ江にたよ記あるへき昔旋せむ三歳
信て所伏をこひしうと御辞退ありしるを今月前田
の人質を江に戸よう流しめし六月六日御養女を黒田
甲斐守長政に預る實ハ保科弾正忠正眞の娘大君の御妹の腹十一日御出陣の
御觸ありて大君と若君とハ白河口より向せめし

佐竹ハ仙道より伊達ハ信夫より最上ハ米沢より前
田ハ津川より四方一度は攻入んと定めしは佐野肥
後守正吉西の丸御留ま居を蒙りし里この時伊達
改宗ハ大坂ふありし其領地上杉と入込しわを
大君ハ見集しし合せのめ御本陣は先立て本國
馳下りしんと願ふ大君御許容めて上杉ハ剛敵
かろくしく戦ふすしきよしゆるじ改宗かし
あむり御説法志んてうけしものよりぬ併るる勝利
をア極めしとて御すしきまをいひつとや大君
笑をせし御辺の心中を察し今度の乱を事

しそ所領をまきひろめんとすの幸なりしとて
景勝退治の後かきり百廿万石の内を知らあて
さんかききよてとくまふましと作ら改定
らちりひて一室の面を向ひ上杉り滅亡のむら
恩賞をよむるの作はさる事されとてしあも
かきり心を改て降参せはその甲斐あり
室の山に入らるるを定してかきりあてり
もわくまて下里一寸にしあも一尺もあれ切れて
茶飲料をせんと中より楢くをくし合戦中
すしき昔中合戦てさし下されり最上出羽

守義光堀左門督秀治りと東国北国の大小を引つ
つきて馳下り十五日豊臣秀頼降参別のこと西に九
系ら十六日大君降出陣あり伏見の城に入り
鳥居彦右衛門元忠は作せは城をちて松平近正
内藤家長松平家忠を加勢としてとめりこの
時元忠は年老その上鉄炮創り足のためひき自
由るも殿上にて杖の降免を蒙り存り十七日の
夜降参は伺候しとて降参するの事あり
かきりその老年をいさうめいしとて元忠降
礼中上今度東国降征伐は大切の降参とてし

中軍勢一人ありし多くはせきせむいんこそ預りし
は一家長家忠二人に侍供ふ人さうらうに侍留ま居の
事ハ元忠近正二人こそさかよいとや 大君はよし
すまじ此頃の人心何となくささかしくあつた事
かふふんもあつたし 汝等四人こそしきり 覚束な
くおのよといふるもは過分なりと申せりとおんせ元
忠さんハ我君奥陸奥守 向をせむひて侍あま上方
無事ならは某方人ハ毎用の考ふらん 万一兵乱か
らえんにを以て城てまの目さん所みして志し後者
せんせら方方らるるハ某等ハ討死をこそ仕へり

さあふんにハ敵地の内陸城中はあつ味方ハ一倍の
勢ふても十倍の勢ふても同じ枕を打死仕へん
へハ多くの人を留かきあひてまよひあゆむ得さ
せん事無益の儀ハはかやと申せ 大君その武勇を
稱しあひてこそ色知かふして駿河の今川はせ
らそれし時海ハははら十二才まで三河より伽羅系
里こそと同一く人となりしう夏の間にこそを
老ふちて片輪とまてなりしころをまよと作られ初ふ
くらやそ今昔の所りのさうらるるをせあひしは
元忠あいとあをこそ明曉ハ未明に侍出陣うら

ハ志を——うけとまゝなせしむる——都万一乱ま
るるこゝ今生の御いと由さむいふていとてまんとせし
足さむいせ倒き伏せ 大君御近習の侍も多を引くを
多し教へるやせし御足送るうつて志を——涙をく
あふ十八日伏見御出立ありさるる大津の城主京極若狭
守高次の秀頼の姨夫オバありて大君の若君とい友婿られ
浅井長政の長女をさるち淀屋に二女高次
ハ妻とちり三女ハ徳徳大君の北の方とせり 兼て 大君の御懇意と
蒙りしよりうさの日大津の城もむゝ入たてす侍り御
餐忘あつておのり妻并に松の丸ををし足氣に入じ
まいらせ 松の丸は高次の妹
大君の妻よりうさ 又家中の侍も御目足しとせし

也ハよき侍余も持し——由御感ふありうまの
侍後丹後守高知を御供ふ多きさるる色より里邊中此
大小名ありし——御餐應上江州水口みせし
里邊ゆい——時城主長束正家ありしけの用意と
りき美ししうこの長束大藏ひそる 大君を
ひきつらせんとの結構ありとせむと 餐忘ののみ
御り考て夜よ入て女の衆物よめして城下を過つる
あふ正家大におとろき 榎山をて追付すつてせ罪る
きより——中よりひり色ハ 大君の御如才うく 御挨拶
有て御せり 駿府の御着かりし時城主中村

- 一火用心の事
 - 一押買致る事
 - 一騎ヶ付物見致る事
 - 一行列乱る事
 - 一馬を放る事
 - 一長柄減かき事
 - 一小荷駄混雜を事
 - 一舟を争ふ事
 - 一近道通る事
 - 一勝負陣を移る事
 - 一奉行の下知違背の事
 - 一勝る事
- 右の事々々於お肯て可為曲事なり

慶長五年七月

大谷刑部吉隆軍兵を引具し 越前敷原を立
て 大君の陣をせ加ふん 美濃國壺井

の宿に到着せし 石田治部少輔三成使者を以て
して 大君をうしるひ 事々々企を以て
一味し 送る 吉隆使者の向ひ 徳川内府の
威勢今の天下に於て 事々々若ありし 是に
治部殿に此企あり 内府の途中を待うけて 長
束と双方より不意に 事々々今
ハ虎を山より 事々々 治部殿ハ才智を
くまひし 我を立らして 故諸人のこと 一致
せし 中国の毛利浮田をいめ 大将
とあり 上杉は 内府に 出陣あり

軍進攻るハ万々一ツ勝利ハあるんハ志しかり内
府ハ事を志すものハ會津を志すべく攻すものハ
かくても治部との好むものハ秀頼公の命あり
うろろんわきまはる治部ハ足重しと止むしと
石田ハ本城佐和山ハ逆謀の事ハわかれとせむ
當りハ逆と中とせむと入り吉隆ハ氣色をそ
んして立出奪取ハ三日ハ滞りして使者をつら
して石田を誹りする事ハ三度ハ及一と志すらん
吉隆吃と勢ハ折りて治部ハ肩をさへて豊臣の
家ハはるく自ら来り深し今もその密議を

告ぐる事成就せらるると知る見をなさんハ卑怯の
至かり逆黨ハいろいろといとせむと一味せんと
て又佐和山ハ起きしハ三成大ハよろあひ長束正
家を呼むるハ評定ひする事折もよし毛利中納言ハ
大君の命催促ハ志すらんて吉川駿河守廣家安國寺惠
慶を大将とし軍勢をさしゆせ大坂ハ着しと
けしハ廣家の音ハよらんて安國寺一人石田ハ起きて
安石をとり三成謀るの企の事はよはけて中細
言廣を上方の大將軍ハあまきとせむらんといひ
本國ハ飯てやせむとせむしとせむしとせむし

惠瓊大坂に臥て甲斐守秀元よかきし秀元大よかきし
き秀頼公の御意知かりししていそ徳川内府をよし
ともしししとあひいともちよふしきいよ書家毛利ハ近
おろ内府とよししうなるとちいもよひいし
とちそうけよしとよいよほともちくそのちういよ
そむきて身行等う方へしよよるやめくちううか
らひといひしうと安國寺あるうちよすめ秀元
そもかきしひけいハカ及よししてとりぶくその旨に
いよ安國寺大に臥て早抄をりつて中納言殿よ
中納言をよしけいいよとちう君御運ひけい時あり

ぬいそき大軍を起して上上坂あきしとあけ
よは毛利中納言輝元卿四方の軍兵を引て上上坂
から十月三日成吉隆正家大坂よあやまる増田長盛等
と談合し大君の御あやまちをよしと立つち一
秀頼公をあきむきて伏見の城を押さし
第二 太閤の北の政所を退出して勝手よ大坂の城に
西の丸よ居候し第三よ前田氏をよしとひその母
質よとち第四よあやまりかき上杉を退治をと
大軍代起よとちその外頼細の事よとちよとち
立て十余条をよしとちし秀頼公の位うると傳

して西國より進軍するし九州大名の上杉征伐に加勢
の軍兵をおし留め合戦の用意を企けり時小毛利
中納言を也大阪より急がうしうに奉行等か
立て大將軍とあまきぬ浮田中納言秀家小早川中納
言秀秋島津参議義弘立花左近将監宗茂小西撰津守
行長等を始として四十余人の大小名追くす大阪
系多の揃ひ諸道に軍勢の催促してその勢都合
十五万國主の下知に隨ふ者三十六國とぞ申すしこころ
小早川中納言秀秋と申す太閤北の改所の市舎兄うら
姫路の城主木下定家の四男うら改所のこめよに甥ふ

あまきぬ太閤在世のとき淀屋のこ市親愛せりよ
して秀頼誕生の以後に淀屋の勢に中外をわけて
ぬ改所は本妻よりうらうら出生の子とせしむる
勢ひもなしあるとき太閤よけて秀秋を養子に定め
らるるうらうらお生の子に如くせたるあまきぬに
小早川隆景の世はまはるはるはる筑前一國を領せ
られしよよ改所はあまきぬをわけてよかほし居りか
秀頼太閤の世はまはるはるはる譜代外様の大
小名
かほし淀屋をあまきぬにうらうら大君一人か
改所をうらうら改所しそのかんとくし思ひ

けう今度の變は至て秀頼よりなみはらうして
かろく徳川内府をそむきむる内府より秀頼を
うしかつんと企あはせむおの命をまじり
秀頼の内よりけうとむいん事あらんけうと
内府をおひしてけうの企あはせむを奉行等
秀頼よりけうはけて清身をわきまき入るへん
とあつてけうとせむいりて秀頼作つてけう
まゝ旨返るけうけうの処に奉行等より
文西園に達せしむ黒田如水一番に大君の内方
とけうの秀頼より送書よりけうのけうとけう

をむ山景友より許よりし又内味方よりけうし
中送るより景友よりけうと景友よりけう
大君の内味方のけうとけうハハ奉行等と一味のけう
けうりて大坂のけうとけう三成のけうをあやし
み心甲よりけうとけうと秀頼と太閤の養子と
いふのけうと制するけうてけうあつてけうと
方よりけうとけうとけうを以ていせむけう
頼公内御雅よりけうと親族の大君と后後のけう
思ふけうとけう今より十五才よりけうと天下
の事君の内裁断よりけうとけうとけうとあつて

ハ秀秋その女計をきりなりつてさし系知せし
趣やうしぬ」此時諸大名の妻子なる大坂まで名よの屋
しきよありしをい三威評定してこしく城中
よよひとり人質とせんとい池田輝政の妹婿榎本三田の
城主山崎家盛といふ者評定の中よくとて王て同々
大君よあろをよせまひせしよ輝政の為をも
かりその室并に二人の男子をひそくおしり
大君第二の姫君北條家より
うろ居りしし所方 黒田長政の苗主飛栗山利安母里
友信二人をうつて如水の室并に長政の室よとてい
大君の姪よあつてをよ養女と
してつる子、実ハ保科正直女 志のひ姿よやつして小

舟のりて本国豊前より加藤清正の苗主居大木上
佐しもう室事を以て清正の子息忠廣の室を忍び
出して肥後より忠廣の室ハ
大君の孫 三威人を送りて細川
の室を城中に迎んとて忠興の室ハ女られもさる者
娘明智光
秀の女 又日出るころ夫の心の奥ハありぬ嫁むとい
嫁ハ忠興の子息と一節、妻
前田利家の娘より かう時大勢方もはきこそからんや
いふも叶ふはるすわとて志のひ出あへしおそ
進付り然とて落のちをさうつて三威の使度よ
及しその催促よあつていさる人この人より
のいめうとてあつてあつて軍勢よし

むく忠興の妻家人等もむくひて秀頼公をむ
きまゝに討ちの兵みこき入るも自害せしむ
ととて門をとりて十歳なる男子八輩なる女子を
さしこみ家火をうけて自害し奥付の家臣も
笠原勝村河北石見七追腹切りしを奉行等案を
相違しそらるる仕出し諸大名を内府の方へ
おろしおんせし詮がしそらるるのち人質と
はへき沙汰なむし先秀頼乱れ忠興の妻
子供をばけて山深きまゝ押しり明智の家亡し
て母子民間のあしと艱苦の中を身帯をもちて

歳月をおろしう六太閤御感のあむ忠興におんせし
叫ぶそらるるを再ひむつゆし中とらるる諸大名の
室大抵の屋敷を移すもの年始五箇句にいま登
城して淀屋にありし忠興の室の父先
秀が叛逆をもちてそらるる一度に登城せし
そのおろしをもち者いかにしやうし事なりと
中き今夜の自殺しつる父の悪逆よりちまうて義
烈の少事むをもちり血すもいよむぬいのちを
おめぬ人をかりりし奉行等毛利中納言を西
の丸にちまうるを秀頼の作といふそらりて

而留主居佐野正吉は西の丸あけりてをへきし
中かろ小四日正吉志のし〜女房達を出して
関東よりしきりてその身に伏見の城を築きし
中納言やと西の丸より三成一味の軍勢を
とのひしし依て出陣の用意し 十五日使者を
伏見に送りしその城をいやくしひききし
きよしを不知し増田長盛此使者に送りし鳥居元
忠といひつけし長盛のて内府の御懇意を蒙り
又市川と志しきし内意中みん今は大坂の
大軍数日の内伏見にせめりて〜
後

巻なり城は盾籠て無益の討死に玉はんハせん
かろしきなりその城を豊臣家の城とて
わししあふも内府の御然りしあ〜市川の
忠死をとりし事今度か〜長盛は
昔き入玉さん〜勢をりて関東
ま〜つ〜
〜思慮を〜し〜
忠使者に向ひ徳川及市家人〜
〜料〜城〜
事叶し〜橋〜

サるへし只攻やうて出ささうあふ座られと著
又増田殿は日あるのよしをサしい内意の
かりむまかしてけあうの如くこの城を豊臣家の
城より衆議の上主人内府をまもるをわく
主人の命を蒙りて留ま居仕る元忠いそがめ
冨きこしやうまそ増田殿内府の御懇意且
元忠よあししきうたれ内意とあふい
元忠の事をまてかちやく下さあふあふを
諫め城をまうらうち死せよとこそあるせあ
きは留ま居の職をまうらう城をあけし
し

忠死の後よとけよと増田殿の言をま
まといひかくけ長盛きて涕をわし一人の
將をうらむ性むしと申元忠人を本城に
集めて多るぬ兵こししけいけ合んすけ
るにかのくかえん所をよくわきて他の勢
をたのまふし今生の兄弟只今をわく
とて家臣の酒宴を催し城下の人家をやき
てまこれせんをまうるときよ木下若狭守勝
俊伏見の本丸あり
勝俊ハ中納言
秀秋の兄 秀俊の事ハ政所の
子ありといふ我をそお父の志あり

かる事ありし 内府の方人きくまきあはれあつらふと
て又ひらりせんも奉行等にまじりて内府と仇むら
ん事いもいしなるゆへひよこましかくあはれんよ
内府の家人軍せんさうらうもこそるまけし所詮さ
をさうきて改所を守護しまらぬへしとてよる城を
出て父なる肥后守家定と京都の家子あちゆきぬ天下忽ち
大君を飯せしのもちあつらふ飲をうしるひらる佐野正
吉諸将をまうて一方をゆめんと乞しに内藤家
長とまをいりるあつらひに西の丸ある主将を蒙りか
かめくしてまひらりしとてあつらふあつらふあつらふ

守りき所あはれその上たふ非難のまうま
あつらひ大板の城あけし答をのうらまうといひ正吉さん
いもい大板えうら死せよとていひ女房のちを事うく
あつらひまひせんためるうらま今六のまをちうせむ
まを武士の面目をうしるふしてまひまをまひらに一書
平らち死せんのも恩賞いのまもまらあはれんを
まうくその義子感して一方をまひらせいりよせを
どうあつらひまうつて正吉石大矢うんとを口業やふ
てて焼死せし十九日大君秀忠公の作せし出陣ま
し先らふし六の目れ夕石田三成の志のひれ利井殊

八郎重茂とふ者三河國池鯉府の宿におひて水野和
泉守忠重刈谷城主堀尾帶刀吉晴酒宴の席にきくありあひ
酒終てのち弥八郎たちもち忠重を切ておとれ堀尾は極
ようれ居取りしを弥八の色を切んとせし堀尾
をよれ弥八と引をとりて押へてこしおる水野の
郎黨事俄に起て主のこころをいづこもあつた刀指
は色を切て入る吉晴の身はまげを穿るる九十七ヶ
所さきとしさらあつて若ちつともひるまに足をのりて
まじし火あし消し大庭よとひて下るいなして来り
けん吉晴の侍一人奈良良伊織はとあつて吉晴をうりて

うけ家のうしろめくらたきけ出で板倉おめ出しか
まのせそ濱松城におそ飯をけき吉晴の男信濃守
忠氏ハ秀忠公の御供え宇都宮の陣ををしめ小山
の陣に飛脚到来して水野忠重ハ吉晴のたぬ
ういましときこゆ大君大おとろきあひいそま
此よしを宇都宮の陣中へはけいあふ秀忠公まじ
し先さき吉晴父子君をそむきまじりへき者あ
あつたといふけたあたる事の如くならしむる男
おひてハ忠氏二心をせんまじりのよそくをいれ
いへしむるあつたのよしとあひしとまて

事のやうにほろろりまきまきしりし秀忠公の人のころよ
くまろしめされし事を皆人感しあつり忠重の
男水野勝成このとき大君の弟佐子をうりしより
小山の陣子次すこしひそき馳上つて刈谷の城ちり
へしとけらる勝成は童名国松丸十六歳のとき高天
神の城攻ま鎗取て名し信長公と弟書師よて黄
せりる成人して後十郎と名のり甲斐の国府の戦い内
藤何某をうちとり星崎の城攻ま父と共なる名し
長久の合戦一番の首をとり懈江の城攻ま非
類なき名せしといふ人天性勝成のまゝ人

父の不興を蒙りて刈屋の城を立出て都のりり天正
十五年太閤筑紫もむくひあひしとき肥后の国より
きて佐々隆奥守成政の家子仕一國人等う乱れせし
はあとの戦い高名し成政をひしりち小西撰津守
の家子仕へ千石をかしこを出て加藤主計正清正の家
小ゆきて仕ふ又千石を又人を切て豊前地
圍より黒田甲斐守長政は千石を長政舟子
のりり大坂上るとして勝成をめし帆柱よりよる
繩とけといひし腹立てそ夜舟のほきりちあふり
まするむましくは畿内と九畷の地をたすむ

所なくして備中國よかられすむいし去て都の
方よこころあしそ上王し大坂の奉行等大君の伏
見の西城攻へしそ治中治外以外の外に騷動よあひし
時よまわりあひ幸なる事よさんるれと夜よ入て
市館よまひく大君悦ひあふ事斜るれ然るとい中
せし市前よあひさる山岡景友を市使よ忠重へ免
々よ作らる旨ありし父の心よけて對面を許さる
さてこそ大君よあひさるる百人扶持不とろく今
度の事起る世はきといあされしなる今遠州濱松
水野越前守
七万石
内老中京極宰相高次關東の方人あて大津の城よ

指籠らんとさる高次の淀屋の妹嫁るれと又秀
忠公とい相智なる色ハ奉行等その心をうさひそ人
質を求む高次からるましとおひしと家老共
言葉をとろくて此城てまの中よひさる立とかれ
依り大坂と申たうひさるしと諫りしとさる
惣之丞を人質よからる廿日西國の軍勢四万人浮
田秀家を大将とて伏見の城をせむ松平家定
切て出て戦ひあはれて引く賊軍はひさる城をとろく
と又二万の軍勢よ小野木道嚴助豊勝を大将として
細川の本城丹後の田辺の城よさるるあめさるる人

き兵を引もくつて忠興具して奥へ下り丹后ニハ
藤孝入道玄旨ニ年老る者幼き者をもつて 残
りてをりしし軍をさ者もかゝる出雲國の位
人三刀谷監物孝智なるつひのにて朝鮮の軍も毛利
の父子はき高名しと賞せられたる京都浪人ともう
て兼て玄旨とむはさしと丹後へゆくせしむ
賊をもおこし多引させんとて城あるに恩責いそよ
まよるしとら孝智いつもりて受引し軍勢五百つこ
て田邊の加勢へ赴く玄旨斜かゝりよるるに賊軍よ
まらるるに孝智出迎一打破り夜に入て又敵を

陣屋へ切入る玄旨は城中の兵を引てこうきよつてき
くい余多とらてりる賊軍竹東立並一城へ迫り付し
を孝智志きりよ出て戦ひしつてきあつてを引之
く攻るはとよ玄旨孝智いのちかきりよりしを戦ふ
寄りの内三谷出羽守衛友らんと皆関東へあつてをせ
しよる鉄炮にむをせしめさうしつハ城中の兵ま
だつく者あつりき衛友元より玄旨入道の和歌の
弟子なほとし催促はせしてかるくてきとらるるを
をりくし軍をせぬかくて大坂の軍破して后玄旨
のなほけきやよらつて罪わらるるに本領を安堵せり

今丹波山家 廿一日 大君江戸御登駕廿四日上野國小山一萬八千石

水野の事この時すしし前始末をかきしな前後 秀忠公ハもや宇都

宮ニ御着かりて 本多正信を御機嫌伺ひの使者と

して小山の御陣よりえさる 三河守殿秀康 結城より

御参りありこの日伏見の使者小道よりもせきて

上方まで御軍おくり伏見の城を攻め由津進を

大君夜に入て秀忠公并御家臣をめぐして御評

議あり本多正信の異見ハ諸大名の妻子皆大坂に

ありて心くわし引こぬへしいそき御飯城より箱根

の関をすれ天下の変を見合せありしと

一坐の初は依尤志るへしと回せし井伊直政

はさういて逆賊ともか乱を起して自滅をまゝく

ハ天のあはるなり 君このときを幸よ攻のりりあり

天下ハ御手入へしもしうひてきみありん

已後ハ東八ヶ國の主を果むんとなす直政

再ひ見系仕るよしとつひつはと立て出さけるを

秀康卿のし直政ハ所をほめあり會津ハ強

てまかりといよき大將を當おきあり父上ハ上方

攻よりありしと作らる 大君うちうるつきあり

さうハ御事を改呼てきりしと信をうけて

とてと一三成りをうらむにて天下を乱らんとせむ条
うらふへも人の心いづれもあま正則みせひてハ関
東の味方として彼凶徒誅伐はるるにこの期まいつり
たまふ妻子を引くまは(きと)中(さ)しけま(黒田)浅野
細川池田を始め有合ふ所の大名一人も残らん皆正則
ウヤ旨よきま(大)君(悦)をせむあるまあま(御)
餐膳を下されまは上杉をや誅伐ま(又)上方をや
先(き)ま(せん)とあ(り)し(ま)は(ま)す(り)上(方)を(攻)ま(す)と
中(ま)正(則)を(以)て(長)政(の)膝(を)こ(う)ち(石)田(小)西(ら)む
を(看)ま(せん)事(遠)ま(出)く(は)た(ま)し(あり)大(君)

下知あつて畿内は近き所領の大名はあはれ玉りつて
先(飯)國(か)き(し)め(ら)る(正)則(は)驥(の)馬(を)あ(り)し
海道(の)先(陣)係(り)池(田)輝(政)を(その)ま(は)け
ら(も)井(伊)直(政)本(多)忠(勝)軍(奉)行(う)け(い)あ(り)德
永(壽)昌(駱)の(馬)玉(を)つ(て)案(内)者(と)か(ら)る(大)和(國)の
住(人)柳(生)又(は)宗(矩)ハ(家)柄(の)者(に)て 菅(五)相(の)子(孫)ひ(を)う(ふ
帝(陣)を(あ)り(ま)す(大)君(は)よ(し)を(守)る(宗)矩(を)あ(り)れ
汝(い)え(ま)本(國)より(了)國(人)等(を)僱(し)上(方)を(軍)兵
を(起)め(ま)す(し)作(下)さ(る)宗(矩)代(々)大(和)國(柳)生
の(在)此(地)に(たり)し(り)太(閤)の(と)き(没)收(せ)り(ま)て(浪)人

を関ヶ原の軍終てのち始て伊家人となりて柳生
の地をむし兵法の達者その上才覚ある人にて後師
恩度々よおより一万石より但馬守に仕立今や
伊達左京大夫政宗本國に馳下てわはれ一日休息し
軍勢僅しやん白井の城攻めし勝軍の事を小山
の陣に注進し三日休息して梁川の城を攻ん
折ゆし雨少くはくき逢隈川に氷出てまろしゆら
所は大君中込主税を白石に流し上り軍勢
し事はけ知れせらる伊豆の妻子大坂に留か
上石田に一味せらる言ひ勿論なり家康をむく

とそおもひん家康あり恨をのこさる中
せむへ政宗きてあそを逆賊の三成め何をい
かき軍を起しつる内府おしり兼て恩
義あきん此初よ及て妻子はひる家名をけん
事あるんやと云中込主税再三上意の旨やきむとい
金打して誓紙を立しりさるる家中の人こも
中候しあやん今日より三日をへていよく内府の
市味方たるきよ決せし色んよを別上意の趣あり
といふ政宗家の老ものも集めてあそひし
皆同意せしは別上意をうけしあやんと

主税俄ち中させたまき入めふ備し 内府より三日の
内は待しと作らさし上中ことみよ中世のうとて其
日やとぬ翌日よつと改宗迫りて一日もあにをこし
きしいうら作らるとしむくさしきくくやせ
めんといして主税ややく別の市上意よの家康石
田等退治のため先上方よりぬへし市辺の軍を當め
速に岩手沢をひきくし景勝をせん振を足ふへし
りし景勝よりあと追うけんを企あるも市辺をお
そして動く事叶ふへくはるの切分捕高名にま
さくし石田誅伐お上へ又奥に下りて天下の軍勢一

同は會津を攻なも景勝みちんまらん事うしうら
し又上方合戦のなうもに景勝をせのなるやあらん
まを市辺あらを以て其當主を打破るむらんを
あと追うけて小山江戸の勢をなうらせうせん
もいつも景勝ハ一戦を破せぬへしとのへり改宗ま
けて大いさほきを凡軍のち若く一尺のきむきも一寸ハ
引くしおして此をと骨折ておの白石の城をせめ
取り故らくもて去んにを人の笑草とやうせん
景勝の軍の仕やうのゆるる今勝よつと
攻入るるは景勝くひい入るしとせむ

此の氣を主税さるるをめぐりあつしをむき
とやいふをばしし由作らせき上杉七強敵なり
西雄争ふとてい勝敗いささか
ゆ一し戦をいして勝つた事なり一
方一敗軍し
むりてき勝つ衆て上方の攻めり隣国をれり
味せはその勢を制しししめて軍をやめむり
又内この上意ありときて政宗小くを傾け打棄
ちて事志つてして成ると上意ふり
ん曰この市上意とい又いりるるそとや
主税耳は口よせ 天下平均の上上杉の領地を分百萬石

をむりんとなりとい一政宗をしめて
山岡志摩の主税をおくせ小山のまゆりは朱印
強こちせ白石の城をあけ大崎の城をうけ
る佐竹義宣は加禰て仙道により會津をむりし
作を蒙りしりあふり西端を持ちし見合せて軍
勢を出させ所僅にありしと免角みいし
又ひそく車丹后守楯虎とす家人の軍兵を
へて會津の加勢はかり上方軍起ししと
すゆ合戦の用意をちり大君使者を以てその
振すむを市然あり人質なりし出さし上旨作下し

りもハ義宣内府よりして遺恨を人ししたてまつ事
かり又石田をてきとせむをせらしうし又質を人
へき妻子を大坂に留おきてハ内府より集りし
者一人もなくれとせむハ先佐竹より弟近代
あましと中こよ若あつりしと大君まき入むりハ
根本の石田よりやしるハ枝葉を佐竹ハあつり
枯れぬしとて平岩親吉并ニ總州野州の大名を
せきのた先殺しかりしハ大君結城秀康卿を
なされおことハこり為事此小山よりあつりて関東を
あつめらるしと作りし本多正信そのは

作ししを秀康卿よりあつりし上方の合戦ハ天
下の安光決しぬき大事なりぬ秀康卿先を
蒙て命をうけり戦しし父上の作をむくも
いりてあつりしと作りしと大君守を兵法
おひて國をめぐり越ゆ軍をめぐり留まの大將
をえりし事肝要しその上今度の留主の陣に諸
大名より人質をおくりしけしハお事なりてハ人
案堵を申しと作りしと秀康卿捕りし
玉を人にて安堵のた先なりハ舎才の下野原を
置しすしと宣ふ
忠吉卿の事 大君市氣色あり

ちりて我々出陣のあとに東国北変をうりか
其上景勝味方の小勢をえんて攻きくらんとて下野
との小作りの軍の事よきゆふ一きお事先
にも景勝は強てきなりよき大将をとめおけとい
ひつゝあゝんや景勝は天下に並ぶ者か
そとちかそとちくして上方の先自をのぞむと作
けしハ秀康卿おそと入る御氣をよそは上ハ秀康
御留まをうけむらう景勝は白河の関一足しつみ
出させたりしゆころおきさるく攻登らうと
宣ひしハ正信きこあゝんいしくも作りの成

とて海を流に大君おそとゆけりけりて志きりお
は涙を流ししはたは御鏡一鏡取出てそりハ鏡
ハ家康おそとちりし身につけてつひは一度の事人を
とて父の佳例に相へて今度奥方の大君してよき
くさして天下の名をわけぬとてまじき
秀康ハ御おそとゆけりしゆゆにゆやせぬ一万余騎
の軍勢引て下野国宇都宮に陣立て関東を志つめ
むし蒲生秀行里見安房守等をその子にせけらむ
東国北国の諸城主おの要害かこそふして
互にゆきしとたり大君御供の諸大名なる誓紙

を献して人質をまつにこれより以前上方の注進の
きこししとき山内一豊は尾忠氏の陣より
比度の事いふおりのとき忠氏つとむは我城の兵糧
はけて内府へ参りし一豊は尤もあつし
と同一に申して大君の陣より福島の味方
多しと申しはけて一豊は出て堀尾の
ひしやう時三忠氏父吉晴の池鯉鯉のにて遠州濱松海
の城あり一豊の城は同國掛川なり
道の大名も参りし城をあけ市家人も
武蔵より美濃まで市領内の如くなりし大君の
市感あつし一豊の妻も

ろき侍へ下して上方のるはくい送るとして道の
ほととぎ地がれいのみを引さきよりして笠の緒とる
しぬ一豊よりありし大君は献せしを
同前かりとて返しあつし山内家させる高名
かくて後日土佐の國二拾四万石ありし此二事
よりなりし大君木曾の難所をうぬひあひて
市家人と市評議あり木曾はむし朝日將軍
義仲の起りしをその血筋代々領しつるを太閤
に至りて没収せし公領にして代官を立おし
此とき三成の下知に依りて塞をはく軍兵をい

たり木曾の市内は山村甚は榎良勝千村平五郎吉重
といふ者ひそかに大君の市陣をたたくは我々の本
多正信をいめて木曾より軍を起しむ二人をせよ
て百姓駭立代官をあらしけむ山申するに
一味し数日の合戦石田の軍勢は跡無て木曾街
道ひらけしより二人も此家人の教に入ぬ美濃
國苗木の城主遠山久三衛尉友次所領を失ひ大君の
くたせまつりて今度の市供はあつていしり本領を
ゆり地下人等僅し敵の要害破て秀忠公の市勢近
とてまつるへしとのそとく中折神ありとて

市の中を業取て夜を日よはきして池のりり地下人
等を僅し累代の地取かりけむを拓くまつるをせぬ
はまつりし者引しきくは友次大よるこむてきの要害
こかしこは攻破り苗木の城かきこりて東山道を奪
り勢をむくしよ本領安塔を今も苗木
一万石西尾豊后守光教
濃州より市味方まつる光教の祖父りと丹波國の守復
職波多野の被官にて初井と名のり後本國をさりて
三河國西尾に住しり西尾とい名のりなり其子出
雲守信光美濃國野口より光教の時より織田
家よりいし信長より恩蒙て二万石の地領し又豊

臣家より久太商薨し玉ひし後大君より久しう
多う上杉誅伐の事起りて自勢引具しかくまひりて
垂井の宿より大谷刑部を逢し久を刑部密謀をつ
けて佐和山より赴らせんと先光教一味のてりりて
夜の間に逃て小山の市陣より久の密謀のてりりて
上し久は市悦ひ大方ならん今より書通のてりりて
かりしよりはしき事始ては久りて直探先より
はけて上りて久刑部もてりりてを怒り軍勢を
光教の本城曾根よりし向け又大坂の郎より妻子を
とてんとせしは妻近衛庵へは久より来る者より彼

所不保くかくさせ多ひしより久を希りし

のうとぬ刑部その郎をやきとて

光教の子教次父よりて
卒し外孫出西守嘉敷也
生駒雅楽頭降須賀阿波守服坂中

務少輔より志のひの使者を以て関東の市方人たるを

由中からり服坂の子息淡路守安元を市供よりとせ

とせしと途中てき地かきいかりよみするを真田

安房守昌幸父子兄弟三成征伐の所怪役よりとひ

はとそ向ひ下野国大伏と云所より久大谷等の謀状

はとそ到来せり昌幸石田三成と相婿は久二男左

佐幸村大谷の娘を妻と久嫡子伊豆守信幸

幼年のころより關東の人質となりつゝいふ所家人の
うきま入らうとき市目をうけあひて本多中務大捕忠勝
のむせ先を配せらる昌幸大谷の謀状をよみておる幸
村よりいひ出せ見よむゑて式代を信幸口はせしめて
いひあはる事よあそんとしむけしそのめ昌幸
せしむそはかゝ人のかせしはたをいひ上^方宿の軍又
かゝせし昌幸而方よ事とてしと秀頼の位をかゝる
ぬさて市事いひよかりよと回ふ伊豆守信幸こゑを
ききて君ハ秀頼の作よあそらひあよき幸村又大谷
もむねはれらうとせし定めて上方こゑ事とていひ

信幸内府の恩蒙る事年久し今此ときよのそみ
關東に向ひうしる矢射て遠く先祖の名を穢し
長く子孫の恥をのこらんや却て不孝よこらうハある
へけし詮きく処信幸よあひてと上方勢よをむき關東
の方人して彼家と共ニ興亡を同じうつ事信幸
ハ信幸關東よあつめらる上方勢敗軍に於ていふ
父上才の命あひをせしむへけしときく幸村ハねを
あささるひんや真田の家太閤のため命をうらた
ぬ日和よき方をいふ方人よらハ武士のをもちしの上
上方の勢とし敗軍せしさまさどく付死せんのか何と

て命をしくし生さるるくくふつましくも 信幸
氣色をくくそねい岳長しと子を父の昌幸がし
笛吹兄弟の異見皆道理にけふそしく今度の合戦を
もと奉行等々逆謀より起さる逆をきくと順に後より
信幸の思慮ゆしとよし軍をておしりて順逆の
汰汰を置いて大坂を多め付け死をえし関東方して
生のいじとよし武士の魂なり父をきこはせし
とて父子兄弟たちまら引こる昌幸幸村といおの
本城上田をかいらんとて信幸も沼田の城を通りきり今
生のいじゆいよ信幸の妻子を一目見えてやうそやと

て城に入るとせし信幸の妻たる女うそ人を門外
不出して上方よりいんをおしりて夫の信幸一人引こるし
東方よりあつし由りけたおそり傷らぬ昨日よりの嫁を
孫もいつくしすそむし今日より敵味方と引
こるそぬかしまの妻子對面しあつるあつる
いとせいら昌幸きそそ実よあやまそり南に本多の娘
かうそそそそそ去ぬ大君大野治長土方雄久の罪
御赦有て石出さそ雄久の前田利長縁者たるより
其のよはけし奉行等々撰状九州に至来せし時
黒田如水ひきき見そあそそ三成就る備前時

をうこうによとて合戦の用意をせしむ石田と一味は
國を打ちさうんとをかう折し一城に普請せしを備へ
然るに國を要害とて人夫を休息させ置て合戦の
用ははるあし一萬一萬東の負軍なるふんは城は
要害とくともまじくといふし甲斐守長政上
杉征伐の帝供する事なき侍らる引具てられ
如水金銀をちりして浪人をおかゆ浪人の内に名を
うて二重に金銀をむさがる者あり如水これを答
め一命をこぼさずして抱へしんとし若金銀
のちりたる之難し貧窮を軍の用意事とする

二重とくもの事し兼て儉約し金銀くはいえ
置と今日のためなり一人の侍も失ふべし
此しより浪人夥しく集るぬとき黒田加藤の
室より大坂よりあつしは如水警固の侍つけて
加藤の室を熊本と送りぬ清正変をまきし
公はかけ石田小西の天下を乱らんとする企し
小西の本城少し破てしんを軍馬の用意をる
也肥前大村城主大村肥後守嘉之助
許より其の等の様状を得僅促に兵船
とて集て肥上はと長門國下の関し有馬

今同二万
七十石余 小西行長

修理大夫晴信 今越前九国 五島大和守盛季 今五島一万

松浦肥前守鎮信 今平戸六万のくると一所に二万より

合い後守彼人こ対面して會談しけり

抑故太閤丹かくもさせ玉ひしとき我子幼きなりと云

天下の事 ことくく 内府の御沙汰たゞしと云

信ここれおのほと道もろく上方のやうに云をい

まもる此度大坂の軍勢を先さす事彼等約公等

私の密意とけんとて事を公儀よりして内府を

わけまゝんとするも人々いふもあれ嘉前

よりゆしていせふ子細あれと本國より引くして東國の方

人伝まきまてゆとておより舟を押しとけこのをよそ

せ集うらう人々大村の旨を任せて皆より本國より

アとら嘉前が肥後の國に使を立て加藤清正を

とよ様状しこり身におのる城を守り軍勢を引つけ

徳本の城さし出しおのる軍を天下大君より

し九州の小石本領安堵の書教書を蒙るひとく

は大村のいさをししりり伏見の城かみを受事

とも十月よ及び城外鉄砲のおとを無事止むときし

さゆと味方の諸將命をかきりやせきしりよせむ

の付死勅しくは城より武千の軍勢られいた

を破るもつるへうしよかりいふ攻あつし折
かゝ寄りの内城中よきしき若あつ矢少くも射
裏切をせしめあつるをいふその妻子を生捕城外
於て磔よりけんといひかゝる八月朔日松の丸より火かゝるよ
せよあつしをいふとつと喚で攻入ほよ上林竹庵
改重あつしを防きて討死にこの上林の宇治の桑園
かゝる大君あつしとつとけいせえ上方勢伏見に向ふ
ときくよう城中よをいふとつと一年ころ内府
の御恩を蒙りぬあつし足輕衆の内よかゝあつし
とのそふしと商人らとつとて鳥居え志ゆつし

竹庵刀引ぬき腹よはきいふとせしえ忠あつて
あつしを留めはひよ一方を防ぐ茶筌を指物し
あつしあつし戦してつとぬ武士にやまうてける
けろる商人らとつとほめぬ人こそかうり色うで軍兵
つとあつしとつとつとつと味方あつしと打かゝる筑後
の勢毛利秀包名護屋の丸よ攻方しを松平近正あつし
て討死に大給のちれ今豊后薩戸の勢西の丸よ攻方し
内藤弥次右馬家長城の大門押しひびき矢束と
きし押乱し近づくてきを待つてさしは先引は
あつしと射る死生にさつし矢庭に射あつしと若

少るくはれこる方し矢無おひの軍兵も多くう
くはる家長安藤弥次多う家次も向いて家長の自害
せんはとことめ小市郎家長の二男同じく敵をうやむぎを
あへしとしむ置て城中も勢をうへし薩橋堂の中
ま生して文一通りきて原田とよ一郎黨をよむ 世い
りして敵をよきれ出関東より此文を殿に献じ
左馬助に家長の嫡子我玄期のやうをうくくくはれし
死し出たらしんよ最後の代して死るんよう忠切百
倍もへしき火をうけよを腹をき切て死ん二男小
一郎生多十六歳安藤定次松平家忠深溝の流山岡甫

安景友の弟甲 賀左門と云と共切て出る事七八度くまの多勢を
追拂ひ十六ヶ所かく手い腹いぬ父と一所も自害せん
と引うつは極火天を燃上り黒煙地よろうり行
方さうりよんてささしを腹をき切て炎の中よりんて
う安藤以下の三人も死を原田はひよ敵の中を
まきこいて関東よりうて家長の文たてを伝ふ事
の孤くをしくヤウもハ家長父子最期の体神妙し
とゆかけき大方うは松平家忠の祖父好景中
島の合戦も討死し二卷父の伊忠ハ長篠合戦も
討死し三の卷二男忠一此后大坂夏陣も討死ん父子并

けし事いさむくるきつ才あり
前鳴原七万石
嫡子忠利世をつき今肥

款本丸の門を押しける馬兵多々ぬ士卒をまけし
鉄炮雨の如く打出させ寄子矢をまた不る若物
くくおみ筑后の勢より太鼓櫓み火矢射うける火
本丸の御殿よりうつり元忠いてさうい言部の軍せ
んとて城中より切て出ておみさむを戦ふらうをばし
侍らるよき款と引くんでさうい仲間小者い
たらさういさきよく戦て死に頼賀の住人鈴木孫一
重次死骸をうてい元忠目うけきこく元忠さうい

くは玄美の段の腰うもりけこれさうなる兵をさうれ
着うけぬとてい孫一志さうてそれい一足
軽の大將のか際さう貴殿の御款よりい御殿めさう
ういときさう元忠さうらうきさうい内に入る孫
一いさういさう鎧をぬせ心よく生害山六十二才孫一
その袖ちきうつて首をばしみ尊行等々款せし
物をしぬさういさう大將のくひるさうい京
橋の口みかくさう都の商人佐野四郎右衛門といふ者
元忠ら許みは来し年比の情さういさういはいさう
い首ぬすさうて智恩院の内らる長源院を葬

まけるし加賀中納言利長上杉征伐の師催侵よるるに
已よ抄まんとせし処よ上方の軍起るし注進小山の師
陣よ達しりまに大君御書を利長まつらるるに北國
の賊黨打しむらけてのち美濃尾張のあしりるに陣
よをせ加りるき昔御不知あり利長頓て廻文を以て北
國此城主の面々を関東の師味方よはく大坂の寺行等
も加賀越前の國主城主は様状しおのり方人よせんとも
利長は返答も及をさりし小松の城主丹羽長重大聖寺
の城主山口正弘北庄の城主青木一矩関東よあしりるに
らせん利長侍後利政と小道より廻て大聖寺の城を攻

んとん丹羽加賀守の軍勢よるるを志つて道をさしきり
しをえ利長お逃げ大聖寺を押しを敷度ののりる
よちりち今月三日城をおとして山口玄蕃元正弘とらひ
おとりたり四日大君小山より江戸御城なり伏見の落
城ゆりるに師悲大方より元忠の嫡子鳥居左京亮忠
政よ父の所領下総矢造四万石をとり東西いくを治理し
後出羽の山石城十二万石の地よりつされ二男三男よりるに
そましく恩賞むりる上林政重の子よ五百石賜りて宇
治の地頭よるるに前田利長北庄を攻んとて軍兵を
よるる細呂木といふをよ陣よりしりるに青木紀伊

守一矩大はかき色大谷刑部々本城越前敦賀は早打を
立つたは又利家長の姉むは中川ハ帝孝の后宗とりの者
あり北國の乱をまて京都より加賀をせ下ると敦
賀を過りてきて大谷刑部を捕いつらりの書状を
せて利長ははくしけるはは徳川内府上方のあり
ありし途中にそ御味方の大名多くはそむききて西
國の勢おて下王美濃の國まで勝軍し内府は三河の國
は為ゆきある畿内を定めりしは西國の勢は数千
艘の兵船より來りて北國をむくまとうけ玉をるよし
はししやふかきめりりり色は利長この書をみる

おそきあやうし細呂木の陣をひきこみ小松の城を
まより刑部軍兵引具して水の在りゆきり大坂の奉
行等も又京極高次并朽木服坂の諸將を命して
北國の村を下りてその勢都合二万人を次せむは及ん
その下知をたして下りて大谷の勢と合て大軍をる
しは刑部諸將の降参を拒く堀尾氏の留守居府
中の城をあけて降人を出し刑部その人質をうけ
諸將を留めて加賀の前田をうせさせしは上方
は越前高次京極北國をむくまて家入黒田伊豫
赤尾伊豆兩人を命して大津の留守居とるはこの城

要害の地をこゝとして奉行等よりとよみ使者を立て
て城をあけこゝしつゝ昔中とていふ人使者に
向ひ主人より留ま指中はけし上へ死を乞ふあけ
こゝの事叶ひしその上主人の奥方淀原の花松の丸居
高次の姉 城中よりいふせうくいふくいせよとていふく
いと使者三度やてくるといふ事奪ふ事叶ひし
きし出羽山形の城主最上義光は足利義國の後胤なり
義國の孫義兼より六代伊豫守家兼より二男修理大夫
兼頼始めて足利家の作を蒙りて出羽の按察使に
補せしむる道より孫當國のよりをいふとて十代

の孫義光よりいふ織田信長公の時義光音信を通
し名馬を献じし大君おし信長公の許より
く義光を名家の子孫なり昔而執成あり太閤北
條征伐の時いしう秘で殿下へ伺候せしきし中通て
陣よりせしむる本領安堵せしむる大君の
而執成るりし色に義光より二男左馬介年より十
歳よりを大君の所家人よりいふ大君大名の子
息を所家人よりいふし始りる色にいふるいふる
事斜よりいふる義光最愛の娘美人のいふる
ありて関白秀次よりいふるいふるいふるいふるいふる

て秀次罪有りしやうぬ太閤秀次の妻妾を誅せしむ
るありき義光の娘の事ハいふも秀次より年々おぼし
くつて命たせしむるを乞ひしをゆるさずし
てつひに畜生塚に埋めしむるはさきより義光ハ遺恨大方
かりし今度上杉征伐の事起りて義光ハ大君の作と
業ありて本國よりせうつて軍兵僅役ハ景勝ひそ
り子義光ハ許し使立て大坂の味方より多しきよし
をいひかゝる義光怒りて大坂より怨しこそありし
内府の御恩いりてこそあはれしとてあつて一族節
堂とせり同心のよし返りて景勝大坂に収まりし物

の具北料として黄金二万兩を賜ふ義光是を領して
家の子郎等よりあつてしそより近辺の城主に據し
合せて會津より入んとて南部信濃守利直秋田城合
実季戸沢右京亮改盛六郷兵庫改兼等あつて同し
軍勢を合せて米沢には陣をとらむ所より上方の軍
起り伏見の城をとりとてつひに南部以下の人々
皆おぼしめて引退く義光はせむき引りて勢城の用
意ありしは初め上杉景勝會津の城よりつてし
后城後とて領地入りし五年貢の争ひ起り堀秀
治と不快の中となりかくて三成はあつて反逆を

企し其のうゝ越后ハおのゝ数代の本領るれハ其のい
くゝの金銀をぬし國人等をそのうゝし一揆を
起せんとし秀治ハ越後の國路を問ひ多き事なる
とこそ人の思ひはき深き人上方の乱おらざるを
一揆も所々ハ蜂起す勢有る人徒黨して津川を根城
とす上條の城攻めし秀治の本城春日山ヲ押せ
んとす堀の家老堀直改切て出て打退く賊數千人
又下倉の城を四方より押せ其直改の子息直寄
八百勢を従へて下倉のうゝろすに賊と數代
の合戦ヲ打たれ賊楯しうゝハ打たるるや一人勢を

集めて再び押せ直寄人との向ひ兵ハ奇を
以て勝といふ本文ありころろそそ尺ハやとて昂堂
ほかの旗立させてたまは向をもろろそそ
ころろ士卒二百人引具し森の内より越敵を引
けりそそ敵こよけ破つおらぬ原直け追つぬ打
てる首數を志し賊も二方の勢を以て三條の城
をとりむ本庄の城主村上頼勝柴田の城主溝口宣勝三
條の後まきせんそそ溝口ハ陀川ハ陣をきこり
賊の軍兵川をこしし藪の中ハ伏勢をかく溝口
先ハ世馬何某川をこしころろ其の巴人異多し

忘却し年来おのり家来の如くもてなすしまつせぬ秀
頼の下知うけあふいそれのらきや徳川内府ハ故信
長公の御縁者よしと小牧の合戦に在り家内をもつ
里人の御叔父信雄卿の方人しあひし事全く天下
を織田の家よりし給ふんの中ころりりきやく
三成ハ使者を切て徳川居ふ早馬よりせかくとやんせ
もあつといひしと秀信何の答しせんその夜近習の
悪人共ともくは岐阜の城ハ畿内ハ近きとハ上方の方
人しあふよまの事あつし近習ともくはあつし
依り秀信使者を切つくりてかつしつとぬ三成魚

味方をおつりんとせん贖金あつしつとぬ此
時つとぬ志のしと岐阜の城ハあつ贖金百枚を秀
信ハあつし事成就の後ハ大國を築つしつとぬ
せしつは秀信收めて三成の下知よつとぬ人知つ
の比より前田玄以りつとぬ此時玄以ハ所司代を
はとめて京都ハあつ秀信の家人等ハ玄以ハた
つて関東ハあつ大坂ハあつ御方人あつしと
あつし秀信つとぬ具康を京都ハのりせ玄以ハ異
見をうけ玉りつとぬ木造を上京させその身ハ佐
和山ハあつ誓紙ハ加りつとぬ玄以具康ハ言書をゆつて

大にかりき織田家のゆき孫おかしそたとい代を
あつそめやまの徳川家の御家に向い御うしめしたる
や作しきまきく早く東國の御方しん御家の安
否を徳川家と共ませさせしめしき祈らうとや作
らる具康をせ飯て見色いたるや三成の誓紙に
加え
軍しあしむむさふ石田をこそうつて城中
呼よせ首うつて御あやまちをこそいふと御めり
秀信はやくき入に近習をさめくや出さめ
はしむ籠城の自主をらる三成に加勢のため軍兵を
よけてつらうしう秀信后日らう金の贖らう事

をさしう三成あそらうしきと深く後悔せしう
伊勢伊賀美濃尾張の諸城主多くは秀信の旗下に
まは秀信の振奮をん念ていぬ奥の御供よきう
さうしう秀信をてく三成の方人をとまきう皆大坂方
からぬ只美濃の黒野城主加藤左近大夫貞泰のこ父無
実の讒よあす此三成の所為なりとまきうらる
あはくふしして東國の御方しんその仇を報せん
かりいしうとこはうら勢を以てたけよへくは
己さと上方と味方せし作よんせんう三成濃州大垣
の城を修し後させ近辺の要害は塞をうすくは

午の
巻よ

を根城と定め関東の市勢をせんといふ十一日三成軍兵
引具して大垣に到着し西国大名伏見の城をくして
追々し到着を十四日関東の市先手福高正則池田輝
改奉行井伊直政本多忠勝清洲に到着し大垣と其間七
里を越えりり敵切て出んとせし東國の大名おひく
よもせ加さう伊勢美濃の内を所領あつて谷を
の本城の盾籠るかゝる所よ毛利宰相秀元ハ西國の諸軍
勢をきりて勢州に打入り長束正家その先陣を
らむりて十五日同國阿濃津に着き此まの城主富田知
信信濃守大君よきりして東國よりひしり夜を日ふ

はきを弛くしを正家使者をきて味方よす秘く知
信いつをばてしとほひ正家の陣に夜打をうけあ
よす破りしハ正家の兵一騎とらりり十六日
徳永石見入道壽昌市橋下總守長勝福塚の城を
伊藤凡毛の勢福高正則の勢二百騎はて陣お打めつ
を壽昌案内して高木十郎をりり勢の城を
攻る市橋長勝ハ福塚の城をありて棄名大垣のこちを
さしし市橋今江州仁正寺一五八十年徳永ハ子志大國馬羽の
城主九鬼大隅守嘉隆その子長門守守隆を奥の市陣よ
使させその弟ハ三成等と一味して賊舟を修り東海

の津と浦とに押入りし兵糧押えて美濃尾張の城
は先賊も紀州新宮の城主姫内安房守氏喜を
嘉隆が加勢は流し長門守守隆東國の味方として
先きの陣は降をもせ下り谷の根をきく志士の群衆
は陣をう使たてて言葉をそらしていさめし嘉隆は
者を追返す大君江戸の城をう上方の合戦は
矢よへし直ぐ由ちてよしと馬をこりし人
弓よはりけ馬を鞍おきて馬發駕をすつといしその
後何の事もなし清洲の諸将今も馬
出陣ありし明日は馬到着あるんとの事し其ぬる

く日よくさめし風聞のいひつるけりし軍
奉行衆大におもそそ早お度々集めて馬出陣を
せりするといし馬發向の氣をう散りして大君村
越茂助吉直をめされ馬上意のおもむきや念めあいて
清洲は流し十九日茂助清洲に着て井伊本多出迎て
上意の熱をとよ事めし福吉以下の諸將の
其心をうりあきよし馬病氣の旨披察せよめりし
井伊本多大におもそ今もてわする馬上意を披察せ
外様の人こいし大坂方よりやせん大事の大事今
はよき事なりぬ上意の熱直すく速くし叶直をう

よき振よりいふ人多く後はより殿の事咎めあつらんよ
我等兩人の事ひひしと村越の内意や合め翌朝
つり諸將を集めて村越を清し入つり村越吉直心中
よかり振を行衆のやうき旨尤の道理こそれ
殿の御明智かをうりのるよ及をせむをぬ事やあふに殿
うの吉直の事を兼怒りのなりと作つてしき内家人の
多き中よ兼怒かるところ身よ上使の役事かせあひ
直よくもくし作合めあひしやうこそあふめ智恵の
深き奉行衆の儀はつてこそ兼怒の生質を改ら
事結句あしうらんと思ひ定り上使の在らまつて諸將

よ向ひ家康風彩の心地こそ旅路を越えさしし出陣志に
し延引をけきいかに思案を極め大極よ方人あり
ん面々といふとき彼方よあつてしと述り直政忠勝あま
もて手よ汗を極むるなりなりうらあよ加藤左馬介嘉明
をみ出あつてこの市上使に上意の越はしんてうけむり
ぬとそ一坐のんよ向ひ今てき目のすし近しめぬを
よ合せの軍しせぬおんくし市上使をまつし
事のおろりよあつてい小山よを誓紙をきししたる
まよいよあつてしきいよ一軍して市上使を信し
しとまつて正則小勝をうち典庇いししをわたり

とるし〜うつちひたさう卑怯といふさうさうまの岐阜
の城攻破て二心なき旨あしきさるんといひ一坐ある合
へ皆尤と同じはく城攻の日限を定む者直をせうあ
のちよや上しう大君あやうい斜る〜い故て若君
秀忠卿も作せて守都宮より三万の軍勢引て木曾路を
のりせめふ廿二日清洲の諸將進發を岐阜中納言秀
信つとを防うんとて軍勢を木曾川まじり向て木造
具原をれを誅め多勢の無勢の事うれ城を〜
守る後お記の勢をもちたさう〜とらまき入の池田
輝政川上よりをせ向て岐阜勢と米野を戦ひ勝軍は福

島正則ハ川下より筏を組て〜竹鼻の寨を攻る
味方諸軍二つに分して池田福島あ〜は〜黒田甲
斐守田中兵部大捕藤堂佐渡守大垣の〜備〜
伊賀国上野の城主分部左京亮政壽大君の作を蒙り
本国をもせう〜城の要害あり〜近江の諸城
皆岐阜の一味なきは籠城す〜富田々本城阿
濃津よりむく六の日毛利秀元の軍勢雲霞の如く
押寄せたる政壽城中より并て出て戦ひ痛を蒙り引退く
知信さん〜防ぎ戦ひ知信の妻浮田々娘る〜み
然〜世よ〜し〜る〜武

此女がうりうりの日知信のあやうきを足て三騎織織
の鐘花やうよ着ちし長力水車の如く廻しててき
ち中よりけつる知信をぬけて城中よ入るやうき目
あやう多勢はて入るく攻しなると一二の城たしやう
らして詰の城よりそ籠る廿二日味方の勢は早と迫る秀
信兵を分て外郭を守らせんと具康いさめてかほ
との無勢諸方よちまはん詮るまことごとく
城中よおとめて防くよとていへ秀信あて守入
具康その空を立て織田家れ滅七今日よきんやう
ぬと歎きうり味方の勢つひよ外郭をも多たてれ也

入正則ハ大手輝政ハ搦手より攻る浅野幸長一柳
直盛監物瑞龍の寨を攻めく城中より此体をとんて
益をもく所を寄手喚き叫んで攻めんと具康
多ふぬ士卒をもけり力を足し防き戦ひ痛手あふ
ていまいしは秀信今日をいへて笠を出して降参
を乞ふ近習十騎あやう移して高野山に落ちた
此後山中より死を正則使者を以て具康の手創をい
もせりう后日加賀中納言利長具康を死しとて
福富正則の恩蒙りしとて辞退し正則大國を領する
といふ知行あはる三家老の列よ入ると鳥津義弘石

田三成岐阜のうしろを巻せんとして軍勢を録川に屯
せむ此日の曉先手の勢三千人合渡りて河岸に陣を
とる黒田長政惣兵を流しして、道をせり、田中吉
改藤堂高虎とそとを合て川をこり朝霧のまき
しそ不意を打てきた兵糧つらひしおろしつて大あめ
て戦ひし、長政は流るる鎧ひつしこまてよみかき
一騎突てかゝり長政家人黒田美作後藤又三博等皆
命をまてて戦ひし、長政いうまきつらん溝の中
とふとおは水もさうさうして首もつらう出りしを
家人等助けあけおの馬を引まね、長政といふあつ

又敵陣にかけつて吉政と高政といふ左右より打てりし
は、敵軍ありあつるまきし所を退けて録川に
追詰りて義弘戦はんとも三成をうらむせし大あめ
敵川をこりして来るほとよ、岐阜の城にもあつりて
かきそのまきしを鎧を合せり大垣に遊ゆ義弘
止事をえり引さつ味方つひに録川をこりて赤坂
小陣とる秀家夜中、三成をうらむ赤坂の敵六千
人よもすし、秀家島津小西と三方の勢を合せて闇
よまきれ夜討をかくし、うらむし昼の戦はくし土地不棄
内の者もあつれに破りし事必定こと、三成は

里を夜討ハ無勢を破る多勢を破る手立に於ける大軍
にてあるを以て夜うちにもあらずして遠くいへり
毛利宰相は秀元伊勢の國より糸會あつて安藝中納
言毛利大坂を打て下りてあつて合戦す
うへに十々十勝つてしりしを以て秀家さあつて
相軍舎らるるふらに岐阜を奪ひし福吉池田その余の諸將
集りて中納言下りてあつて徳川内府も来りてし
さてハ對一の軍よりして全き勝つて定めし
以て三成きて入る其期はあつて臨機應変三成軍配
あつてその夜死評議は止まらうは伊勢の國に於

阿濃津の城を以てあつてしりしを以て大將毛
利秀元岐阜の城を以ていんとて高野の木食上人奥山を
以てし双方の戦をあつてしりしを以て富田和信は城
を以て高野小赴き城を以て毛利の軍よりして軍
勢よりして守りてしりしを以て関原の戦終つても此度の勸業
は知信三万石所領の地加一玉よりして本領あつて合戦
七万石を領す後事のは浮田左京亮と争ひかして毛利宰相伊
勢を以て岐阜を以て奪ひしを以て城は以てしりしを以て
期に合戦せしりしを以て南宮山に陣せしりし出雲の吉川
廣家土佐の長曾部盛親水口の城主長束正家安國寺

惠瓊その子よはくし廿四日味方の諸將あつて赤坂に
集て陣屋をいそぐふまきより以前石田三成尾張美濃の
諸城主は下知しそ犬山の城にこめ尾張岐阜のまきし
かひ加藤貞泰せむるくその下知をいそぐぬ事
よせりひ竹中重門関一政等も関東伊味方の事をまきめ
岐阜の城おつる至て皆軍勢引具し福富池田の陣を
まきし随ひしより十日の日もいそぐて犬山の城
かちしりし大谷刑部早赤を以て北國もむくひし京極
朽木脇坂の人をも大垣をもせのりまきしよいそぐは小
早川中納言秀秋はくしそ関東まきしをよせられ伏見の

城攻もまきしあまひくしてうらうらと諸將大垣の城に
集るまきし秀秋はくし近江の守家も陣をすえ病氣
いひまてまきし秀元の伊勢も赤坂とせりしとまき
一同まきしとあけしとまきし三成等秀秋のう
ら切をおもひ二人の將をまきし密偵あつてつらうて左右よ
りまきしとあせんとあきしと秀秋疾こまき
くまきしとて對面せしまきし心よくつらうたし
まきしとて返されやそ大垣もゆきて使者を城中に
はくしし味やらん城中の人こい秀秋失せんとの結接
あつとろけいゆらうぬぬあつていあやれく城中に

さし関東の勢破て後まこと年會をくし色といをも
はるに三成等とあひて争ふる叶は濃州松尾山を秀
秋の陣所と定め脇坂朽木赤座小川をそのまに陣をせり
實も秀秋のうろ切を防ぐんとせしきつる脇坂以下の四
将も秀秋と同ふしむるふ黒田長政も付し裏切の
約束をなすしうろ三成等もいへく秀秋をうろこし
又軍勢の多きをとおそむとく味方も付るをきし
と思は使者を遣りし事成し上六大臣を
あつるまをく秀頼公の成長すて大將軍と仰ま
るてうろとて一味もあつる秀秋もいふの者

と安藝中納言殿を大將軍と仰まるてうろとて
一味もあつる今又秀秋もくし送てあつるとい大坂
にも何とて大將軍の多きをやとてあつて使者もい
三成等もいふまりの多し秀秋もいふ無二の大坂
方からもいふ様の使者にもあつて返されぬと告
川廣家舎元元長の所領をつく事備へ黒田のうろ
なるに色に七ノ巻西家のあつるあつていへ今度の乱
起るときして廣家関東のゆ方人うろとて黒田の件
もやつたせし秀元の陣も陣もいへ秀元も味方
のゆ折しやとて南宮山の陣もて志きうろとていへ

折ふ徳永壽昌一人してさめくみせりし秀元
頓て其後子孫いし廣家ひそく人質を赤坂の陣中にお
くし織田信雄は数年伏見に隠遁の身となりその子秀
雄は兼て越前の國大野の城主となりて 四万五千石上杉征
伐の所僅僅に随ひし俄にころころ事ありていふ軍
をい出さるるにけり歌伏見の城をおしてのち信雄をそ
ぞのし清海の城に入りて軍をかゝりし伊勢尾張を
南本國を領しさせめそん事お違あまらんと
いそせり信雄入道にの内は 大君の恩義報きしと
おのころころと賊のいまりい進めし苦のあまら

皆ちりりころりて軍起さんる叶へくとそらと
けし賊もさしりし家人等石集めて物の具といひ
あふしとそ黄金千枚をせり入道よりとあま
アかし頓て味方なきよし 領事せむる子息秀
雄此結構をまて大おとらるいそき使してころそ
ありし当家の人と徳川殿に向し弓を引矢を放つ
事やりまきころり時ありし此結構をいひと教訓し
たりしこと入道よりいひは月秀雄卒去し世はまな
くそ所領はぬせしころり信雄入道たのしきころり
なりし橋し関東より中へん大坂へや付んと葉し始ふ

内子関ヶ原の合戦事終りしうも 大君おけてその罪を
咎めあまのい入道その后に淀屋のゆりりうつき 京都よりこれ
住まひりし九月一日大君江戸市登駕東海道より打のふ
まあふへき旨市觸あつて松平因幡守康元大君の弟
異父弟 奥平
大膳亮家昌市孫は
あつた 西人市本丸の市留ま居を告めり 石川日向
守家成菅沼織部正定益 諏訪安藝守頼忠内藤仁兵衛尉
忠政弟五の市男七郎信吉の市後足して 西の丸を守り
家成 大君の市前まで今年西の方金神おさうりし
市祈禱あつて後市出陣あつてとつけしに市さう
る西の方 家康より向て関ヶ原へまゝしとて直搦市馬を出し

うふ二日秀忠卿信州小室より陽着りり市使を以て真田
安房守昌幸を召させらるるに再度とあつて徳ひいりてあ
らぬ五日榊原康政 若君の市前まで昌幸の軍法よくしり
古ついのあつて今家つるるに夜市もあつてきり
はとて篝あひいりて焚く 徳ひけしに昌幸をいりて
きりりしう用意あつたとて引退く六日その本城上田より
攻めせあふ昌幸金川の水上をさきた山中に伏勢をとりて戦ひ
半よして逃出を所を味方につくまんとて追つめりり
かゝる所は左田の佐幸村あつてをまゝつて出陣し山中の伏勢
味方のうしりり起してつとけは味方の勢かゝるま

乱し一時をくり昌幸金川の水切をせしむ味方
の後陣はしめて已る事叶ひ先陣の勢一人のさ
うこせぬまよより三日ほど款味方にみ合て戦
かろ里し真田信幸は此時若君の陣を破る
より日引し父もよ書通して味方の事をせし
うとほひはれし氣をかし若君は上方の合戦か
をん事を思ひし番の兵を留めし東山道をのり
あひ森美作守忠政川中島の城より仙石越前守久
秀小室の城より誘て真田を防ましめり昌幸は
あひ付りし叶ひし越后國主堀玄督秀治一揆の

勢と数口戦ひ決せりし時、^の高田城を
破りし大君は江戸寺登駕ありしとて士卒のさるは百倍
八日家臣堀監物直政等をさし向て一揆の奴原を下
田より所を破りし上杉が勢の兵は本國より
ゆりぬ秀治の勢一揆の根城津川を攻めし、當國守
騎の大名村上周防守頼勝 本庄六万 六千石 溝口伯耆守宣勝 柴田 四万
四千石 兩人の軍兵をせし所々の一揆と戦ひし
此時越後一國平均を九鬼長門守守隆ハ父の嘉隆をいせ
り軍志士の群衆を對陣せし大君師のありありと
ゆて、遅滞の罪をせし鳥羽の城よりせし父嘉隆と

戦ひ中泉の御陣よをせなうてありしるゆし中とし
ま大君は氣をよきい「先進てより丹后邊ニ城築し
ける細川玄旨法印とやい弓矢并物より堪能のるるは
知くぬ小藝をよき達せよといふるなり天下をいひなき
多才多能の人なりり申し志を志のそちをわくすき
古今和歌の秘決こもく西三条殿よりはさるるぬされ
は度我身討死さるるのちはこち也く絶らん事
をうかしく城を築るをしめ相傳の書をしりあ
はめて大内を替るとして

古も今もそぬ世の中よこのいひ言のそ

とよ一首の和歌をよきて多きせりうかくそ石田の僅促よ
志いふ丹后但馬の軍勢雲をぬの如く押せ十重廿重
取巻を大水よりつて攻めよ入道ちりよいひるん防きよ
いふほよ中く一時の攻めよをよきも刃をい鳥丸右
大弁勅使として前田玄以りよ行向い勅使をい
たくらうそ和歌ハ我國の風として天地ひけけし
り皇以来百王今よいよきその道永くはさるるぬ然
よ今古の事をも和歌のよきをよき人いよき
ちよ失いん事尤朝家のるけさなりいよきしを彼二位
法印をつらちりよきやよきと宮よよきより

毛利を始として寺行等謹んてけむりり早馬を立て
寄島の勢をとむむかより入道に今を最期とやりし
切て戦ひしほとよ寄島にやひくひきとつらん事叶の
へうんはより又都よりこころしり三條西大納言局綸命を
かみりて丹後國より下向りて速に勅に應その城を去
しとろけし入道城を去て龜山より送りほとろく
関原の軍をそしとめて高野山より赴きくら大君を
の戦芳を思ふも京都にて隠居のき古作つらぬ
主上公卿達のゆゑと和歌に伝能るるくくく
勅諭あつてその逆受をせむぬ前田利長妹婿るる

宗伴のつらりの書をみてかきつきた細呂木よりく
とき土方雄久小山の陣よりあつ合對面して大谷
に先よこかられし事をさしり青木の城をせめさり
しを後悔する折より大君の使又到来し以て軍勢
をよきものなり美濃尾張をさしり陣よりくく
よしはるる利長直探出陣の用意し舎弟利政
も能登の軍勢をさしてあつきたつらしけし
利政こそは陸軍の最初父利家の病中より兄弟の若返り
て徳川家日こまあり秀頼公の市に先ありり
なと物かろせしりあり大君伏見より利家

許子卿軍ありしとき利政兄に向つて大君を失
ひたせしむらんともうけし利長急におしめぬ答に
席をかきて利政さしそへ申しなうらう大君の御身近く
出みて御礼をなすしとてまじしとせんとするを利
長目にいせしてまじしを制しはひしと申はるかうりま
その後兄弟の母人質よせしとて利政くくくを
とめ大聖寺の正弘攻しときも利政内してまじし
とのときようらう心を味して三成り方人となる利長
御がけしお方権久を流ししとていひしとてい
と疾かりしとて軍勢をいひし利長せし

るく我々の軍勢のよて後足利折る小松の城主丹羽長重
関東の西方人となりし利長と人質とりしして又
大聖寺の城に正弘をこししのもち大坂より番の兵をこめ
けり利長向ふときそ遊さるぬ利長扱て使者を北庄の
城にけり青木の砦をせめんとし一矩とくありし
一味の氣をなすし京極高次大坂の下知まをこし小國下
アししひをうら哀切せんと企しよ大谷り早井到来し
て大垣をせのりしとて高次一人のよと諸將をか
く今月三日かの大津の城に歸り達坂の園にしか
多め兵糧をあつめ町家をやきとこひ菴城の用

意をちりけりし立花宗茂筑紫廣門大坂より大坂より
起りんとて石部の宿より高次より高次より高次より高次より
とて互しと勢田の橋子陣をとる毛利中納言はよしと
中て秀包を大将とし大坂の武士多く随いせその勢都合
三万人大津の打ちよしむけら逢坂の関に陣取り淀原
より妹の城中より出れし人をもとめし孝藏尼阿茶の
局を使ひ立らば此二人の女より才智をもて大坂の御
氣に入り幸し内々の御使をたためけり秀包の勢よの使
義に依て関の内より出りし事をたより二人の使高次の
室より至りし淀原の信をたより早く大坂の方人となり

よりしとせめりしに夫高次北国より御ついでしむり
へし入しひかりて向のりし女の身よりそんしむりし
人より高次より至りし物念の折より高次對面
せりしむりしとて出合はせむりし城を出ししよせりし
勢をちりけりしとめたりしとてみちんよせんともりし
りて攻り幸三日三夜敵味方討死地ひりし宗茂より
武勇のほされかかれりしとめりしとて士卒よせん
ちて城のりし人よりしとて諸人の勢をちりけりしとて
はしりし十二日一二の城を攻りしとめ高次義をこめり
恩をうけて諸人をめりしとて大坂より侍の命を

塵芥を比し仲間小りのよりふちをむく心更なるし
敵はほとく攻めたる本丸を向ひて大矢をそらへ一落
放つて櫓を焼くも城中の道を少せきくもの
をうらむ十三日大君岐阜より着陣この時大なる柳
を献する者あり大君所懐りんるりく大柳もや
まへ入るるとして蒔ちりし近習のくまを捨てて興し
あひしより大垣を大柿とかきあへしめ。事といふ
ぬ福島池田ををしめいてむくたてわたりし所感にあ
はる黒田長政所懐近く伺候し一向の傍後すれ
畿内の一揆をかこむせむりしてきい足えよある起て

ありし所をうちむり必定勝軍うしむるん
とらふ大君守りし尤の計畧ありきるるる家康を
武威を以て乱をかきめんとし坊主の力をりし
やあぶんと作らるる長政恐入て退きぬ諸將大垣
を向ひらんとしゆりしるく大垣を要害堅
固の城とすも軍兵多くて兵糧不足なりし
その上浮田秀家大将となり島津小西大谷長束心を
合せし守るる力りさあていかしわあし但石田め
軍師となりて軍法をきりされい多勢を頼し
城を出て戦いんとすすめさるる秀元秀秋をてよ

裏切の約束せしむるも款多勢ありとも一戦皆殺
せんのしむし大垣の城をいする事をもやせはふおどしめ
この勢のうごくをよらんと是ゆのたまきしうと記
てうむら仕やうを尺よとて十四日赤本陣を赤坂より所
し岡山に陣しぬは前軍次才の数百向つてもむ
てまの物尺大垣をもせぬり寄手の陣人夢さわうく
武者候尺くんと注進氏浮田秀家三成の會釈し
城中のたつき思ふあうつて赤詠むる折く物見の注進
櫓の齒を引くことく徳川内府来りうると告ぐ島
左近秀家に向いこき内府のよせらるあはれゆらうて

城中をかといのそるんとし秀家らもしきこを思ふ
かうもくあしむ又内府実よ来るも我手の内あり但
敵のきこむをんておて出さるん憶したうるんとは
しん口をしうるへよせの陣定おぬ内出遊てん
しと下知さ左近こて勝利も伏勢をおくあり
そやうをの勢を先自もむうせんまうそらとそその
坐を立て城を出つ三成の勢を以てあきまはる
株川をこくう中村一栄の陣よおてくるを一栄さわ
くんそらとをこしして迎へしる者馬去蕃取てまの
よこよりおて入るとも款をもこして遊出ぬ中村

有馬左右より江戸まで追うけく川をさし追つあり
大君園山の陣よりもるふゆらんし故式部少輔一榮
さる古兵りのありし家人としまて戦場をかきこ
や急道このをるま立なりと御書ありやうそ川をこ
たりて追うるをゆらんし長退を詮りあつ侍
をし討すると作せしをさるひ伏勢依り起て味方
大に敗軍し一榮よりき郎黨ありと討死の敵様七
迫りて引えしひるまひんん井伊兵部本田中務
みいそき向てあせ引あけよと作らるる近習の侍
引はせそけ向ひ大喜あけて戦ひるひけ一榮と

ひるせらるる殿よりくまの敵あつより追う叶ハ
たりし大垣の城中より城をちると出て戦中といつこり
勝利がふんとて評議ありかりし故敵のあひさ
自合の軍とせしかりけり此時大君実向ひあひ
事をちり諸将のさるひ集めて評定の毛利秀元ハ
長束正家并安国寺の惠豫を城中よりせし軍の下知と
とをせらるるさるき惣大将浮田中納言秀家人々
はむらひ徳川すそるるさるる関東勢を合せて
押よせぬしこの城要害堅固なるのしかるひ軍
勢し兵糧と夥しうこめたははかそ多き事更な

し免角の内ふと出迎大津の寄るをせ糸のつく
毛利中納言も大坂よりきて後おきしあふし
内外より打てかぐり鷹の雀をとるごとらん十分の
勝利うらふくはといひ大谷長束あ人尤も同じ
るを三成入陣いせ味方の勢は十万余路よせむは
已はる五六方一倍の軍勢あて筑城もろのあふき想
して軍の肝要は守るべきときいさなり戦ふべき時
は戦ふそし今秀頼公の仰をうけい満ちつて徳川の
君せめんそと軍をおしおめくと戦うそはし
城を守ると天下の人あはるるん天正年中小牧の

合戦数日あひひに合をりしき勝をせ
するは事先君太閤千慮の一失戦よべき期をかくれ
玉ひし前車のいづのいづあり関ヶ原は平地も
てきを待よ屈竟の坊所浮田中納言本陣をりつて
かこよ退き陣しあも毛利宰相秀元先陣も
こ東國勢をもろも島津よの菩提提山より虚空藏
みおもむきて敵のうしろよおめ人三成は諸大名と
三よふらよはきこえんく三方より打てり
録川合渡よ追つめあは馬一疋も逃しはせし天下の
大業目前あはんといとわこりも速く色を勇気よ

をやるべくいさる此謀をばひける浮田も是非るく
きくしてきては城をさすしとすハ明日の戦も全戦
せんとも諸軍の勢もあきとせ吉隆大谷を使し
松尾山から秀秋も合戦明日も定りしうはとせけた
島津義弘出るとき城外の陣ありしとせをまきて
家久を城中より三成よもせけるハ今宵ひそか
軍勢を出して敵の不意をうちし義弘も陣をけ
破りしんハ徳川家の志ありし敵も多し敵りし備
へありて夜もちしとせかばんとせこそ明日も原も
て戦いありしとせをさる三成のいさる馬た迫

側はありて明日十分の勝利ありしハ又こそ徳川家の後
曹えんりのを危き夜抄ハ使かうきとせとせハ
三成打うるはきとせしたとせなりと夜抄とせ
かけてえんとせ念入をきしハ謀事とせとせ
家久もはくとせ左近の方に向ひし徳川家の乃
うしろ曹えんりしとせ事のゆかりと尋ねぬとせハ
さんいそとせしとせ甲斐の山縣の家人ハ山縣袋井ハ
向ひしとせとせそれしとせのゆかりと尋ね徳川家の
うけしといとせとせあさとせハ今の徳川をむし
の徳川とかりとせとせとせ杓子定木とせとせ

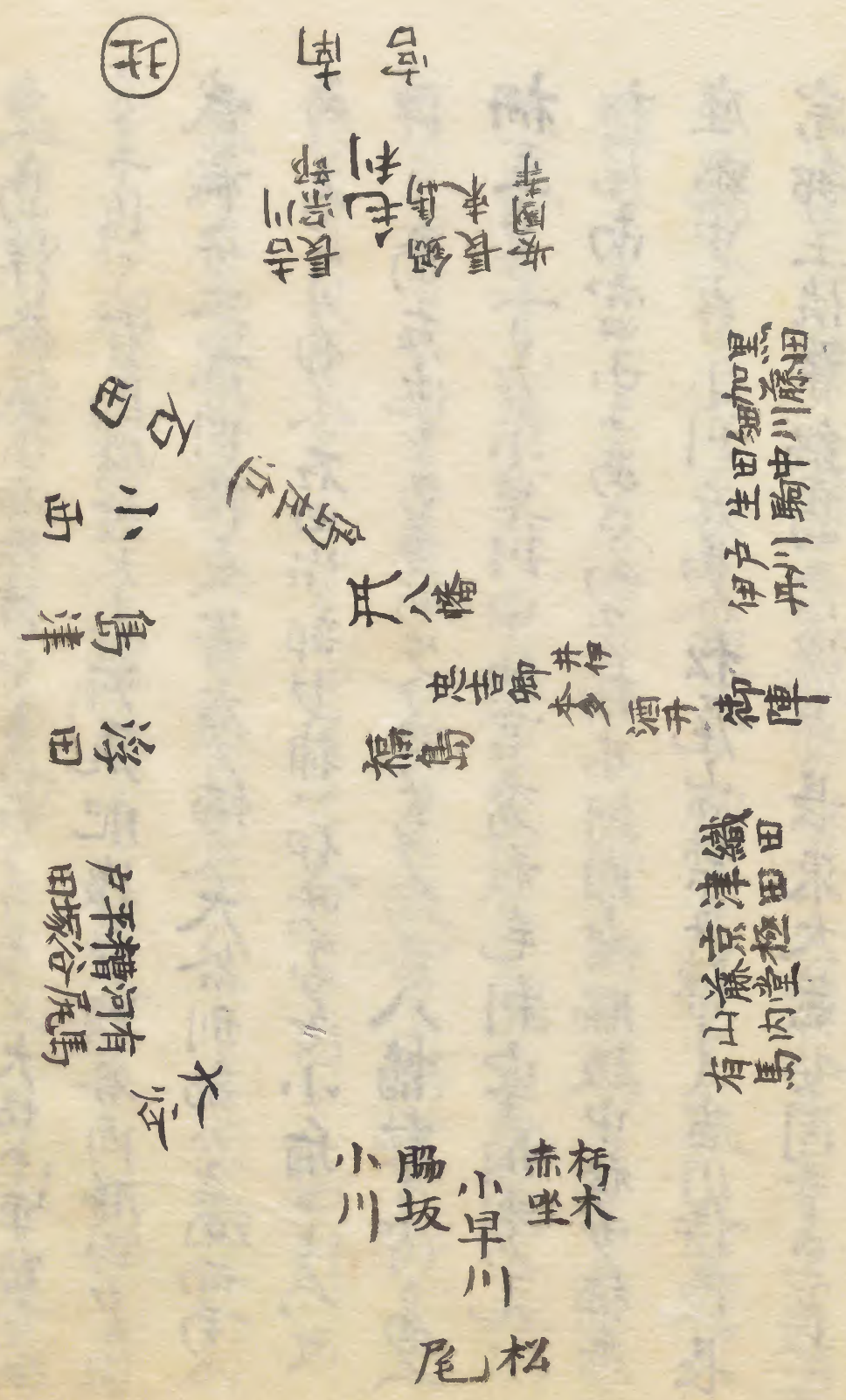
望をたて立て出たりし正家惠瓊ハ南宮山より評
定の趣を以て秀元より秀元ハ其の陣より出
事を好まぬして我ハ文中納言との、御名代として
おま向たりし、その浮田、惣大将とかりて日蓮を
先より定めたるハ中納言殿をうるしむ事とて
以の外立腹の氣色ありしハ兩人さむく死戦觀らる
まゝ入り三成七頼ておま向りて君大将とかり
多しして諸大名御多しつぎ浮田殿七一軍の大将そ
大名衆を引きあへハ御同格とてこそいふべき
御父の中納言殿をうるしめ、そのまゝんやといえ

秀元少入の三成せむさへは日蓮く浮田殿と
ておま向ひれんさる間合戦のあらはま至て君ハ山
の上よりてきの横を井入めしとのそむ秀元こそと
おま向ひしる振よりてるしぬかそその初より
栗原おかりをたせけら、此辺踏せはくそ人数より
急よとのそ折し、俄雨ありそ多めとそとや
るま何とる、敗軍のまけし、ことば向し、まき人
多しりま、三成の妹婿福原右馬助直高、并相良宮内
少輔長每、林月長、門守高橋右近大夫元種、垣見和泉守
家統、熊谷内藏允直、陳七千人の勢、大垣を守ら

此とき相良秋月高橋三人はてなふ志のひ死候をりつて
関東の味方を乞ひ裏切の約束をなしくうし三成南
宮山より又松尾山より小早川の勢を扶招して関ヶ原
より味方の物乞退くをせううてその搦手を
注進せしむ大君より乞ひ款の手の内に入らうとい
そまき兵糧はふへしと陣より支度員に京極高次を
籠ら大津の城落るより大坂より高野の興山を
はらうし和睦をせめらるる高次命をうけてきて
入道淀殿よりきて孝藏尼海津の局を以て和議の
事このし入らうと奥山に再度集てすめりて

もるおらう寄目の方より石火矢を放つ松の丸屋の女
の立里をまゝ驚きて死らるものあり及ふ松の丸屋大
おらうとあるうらまをいさしういふの口てきと人
質死らうし城をこして高野に落ちてゆくし明れ
と十五日の曉 大君市旗を抛配りせめらる福を
正則先をせめて八幡社の南に陣し井伊直政伊四
男薩摩守房忠吉の市供して本多忠勝と先より
はく加藤左馬助細川越中守黒田甲斐守中村
兵部少輔生駒讚岐守竹中丹後守戸川肥后守伊丹
兵部等市本陣の右より入て菩提山の南に陣

一 京極丹后守 高次の弟 織田有樂 長益信の弟 藤堂佐渡守 内
 對馬守 有馬玄蕃 願津田長門守 等ハ涉ヒテヨリヨリ
 牧田の西ニ陣シ 酒井左衛門 涉本陣の先陣ニヨリ
 大須賀出羽守 後陣ニヨリヨリ 西尾豊後守 津輕
 右京亮 松平丹后守 水野六左衛門 留ツテ 大垣をさせき
 吉田侍從 淺野左京大夫 有馬金森 徳永三家の法印
 一柙 監物 梶井ニ陣トツテ 南宮山をさせき 其の余
 外様 譜代の國主 城主ハヨリヨリ 涉本陣ニヨリヨリ
 内目 勢合 七万五千



忠吉卿の陣より此處を先陣の陣に
なり先陣の人々等々軍もさやう
陣供して福島の陣のこきより
解出た吉長今日の先陣の福島の
を先陣の陣に先陣の軍もさやう
直改の忠吉は先陣の軍もさやう
さきとて井伊侍従の陣供もさやう
さかさんよ同勢あり影しうれと
直改せむくおのり郎黨木股右宗
此の勢を敵よりよとてさうさ
数十騎もて忠吉のつと

をせぬけて鳥津の陣に切てさう
敵忠吉卿の陣に切てさうさ
うけとめさし敵の馬のこきより
組て両馬の間よりさうさ井伊侍
さうささうささうささうささ
くせあふ直改の陣に切てさう
さうさ合本多忠勝の陣に切て
さうささうささうささうさ
陣に切てさうさ負軍してさう
味方逃出さんとせしうさ正則大
怒り一足し引りの

い首切てまてんねとよきうり秀家も士卒をけよして
敵味方の旗入りし軍追つてつ戦かうし黒田長政ハ
島左近の陣むむし柵引破てみんとん左近馬を鞭打て
若もはけけといひもあつた一番に駈出し鉄炮の中てと
とおちあくるく息ハとてりせハ勢もちりくさるるし
田中兵部大輔生駒さぬきの守竹中丹后守戸川肥后守三成
うちんよ切て入り舞兵庫蒲生備中とたぐひもこし
をめまて十五さうり引けしハ三成悦ハ軍は勝るも
とて狼煙をあけて南宮の陣も合同し伊吹の林を
下つて攻大鼓くくき四人のあしを追うけしハ南宮の

陣より一騎も出ぬ長政并加藤嘉明細川忠興てきの
横より打てくくしハ四人の勢もあしりみもんてくく
たうし大谷吉胤刑部の子木下頼継和隆の子平塚為廣戸田重政勢を
合せて南の方よりもくみくくと京極高知織田長益同長孝
長益の子息藤堂高元津田信成出むくしハ敵の矢さすやん
くくし戦てハひきひきしてくくしハこのとき諸軍も
入るれ矢も玉もあぬの如く馬もあつたよあもひき矢
さけひの声天地を動し死骸山をつき草木も朱もさ
たう日ハもや午の刻もくうりなき勝原につくしつあ
し敵は勢時くよきもひぬくくしハ小早川秀秋裏切の

氣を見てさへ久保島孫三掃部本陣をせんとて秀
秋伊豆末みそむきたると云ふいひこそしゆん
中上まは 大君御氣色あしくさては彼小冠者たつた
いふなり 汝鉄炮の足程はして松尾もむしむなり
彼うせんやうをんを位らうけいぬもつては松尾
まうけよせては夕一おふおらうりくおきより以前に黒改
長政大久保兵輔して松尾のうら切を催促させり
兵輔松尾の陣をせり秀秋一の老平忌不見を取
押へ差添ひきぬき胸はきつめ此期に至り裏切の氣
色をいふ万一はうらうら控ては一つきはき直に

へいといひして平岡いっていほをりや(ま)こりせんやうをさ
しちちあへといひたて孫三掃部より鉄炮おけり
まは裏切せよとて山をせ下る侍が八千人鉄炮の足輕六
百人 大谷刑部陣を向けうらうら氣色をいへて脇阪
朽木小川赤坐喚きさけんであとを長く刑部は癩疾と
やまらまは青き縮りて面をほくみ物具せりして駕
籠ののりけり秀秋の旗をのりて小降め太閤の恩を
こもましうとて駕籠をとをせしやくをあげ者とし
秀秋は旗本を切てつらうらまは小降首おれといふ
て火水よりつていひうら小早川勢原をよりうら

所ニ織田藤堂等と戦ひし吉胤頼継もかゝることを
きて、秀秋目つけつてかゝる長益高虎もさうせん近り
け小早川と前後よりも攻めせめしむ歌過す取
りてハ右のそるハ敗つたり津田信成ハ戸田因幡守戦ひ
勝負はりし所ニ織田長益もせ令せ鎧ひききこき
戸田ハ脇腹くさと突てくひ取りり平塚武藏守等を
ハ小川の侍ちとりぬ大谷刑部ハ郎黨ハ湯淺五介と云
者あり刑部ハ前もせしむり武州戸田因州平塚も取
まてハハよき侍なる取死をとけてるりされし士卒を
あつゑて西若君吉胤頼継さへめいぬ今ハこれまでハ脇腹

欠さるるり刑部打うるはき軍用金とり出して家
人等もけあつて暇もせ五介ハ向ひしむてき見
せるとしはあつて腹も切て死てり五介介錯し
喜太夫といふもの刑部ハ肌着の袖引ちまり首をきいて
深田の中も埋めハ五介ハ首をせりし
とて藤堂陣もせり藤堂高則仁右衛門いぬ
ういり吉胤頼継もさうし士率もぬされりハ后
陣もせり里で駕籠の内ハ父のあらはるるをえり
まをとり合せて大歌きさしちるんとせし近習の
侍ハ諫めりし本國はるか志のひるり城ハ爾籠ら

んと申せしと催使はあつて軍兵かけとそ又大坂不
由き頼継をほとろく死し吉胤は元和の合戦より死
せり味方の軍勢松尾の裏切を足るより大にきりしゆめ
きさげんであつてふかよてきささる兼て足る浮田
秀家秀秋のころあつてを思つてはたかきけ
向ふんとは家の光明石掃部介全登六世を留めし
くと秀家さうい徳川がふけん事叶ふへん今ハ
いさきよく討死しそ太閤の所恩あつんのかいこ
馬引せとをや立を全登掃部介を留め太閤の所
一族皆をむきあふも君而一人秀頼公を守りまめ

備前美作は太閤なり再ひ牛角の軍かりぬへしそまに
てしお負あふんは固山の城お盾籠り天下の軍兵引うけ
て討死しあふもをうけしとくあさせ給ふしと
いそしてあはしお壘し近習ははた數十騎はく本國は
てあふも敵の本軍はひよ破り名をけしも侍は皆
つし留て討死も浮田侍大将何内七郎右衛門武勇の
誉もつけれなりしと此とを組の侍引は通て縦
さの横は切てまをる明石掃部吉をうけ詮らき討
死かよけりしとあつてあつてあつてあつてあつて
かろひ討死をるうめつしとあつてあつてあつてあつて

を大野修理亮治長家人米村権右衛門と左右よりはき
殺し掃部ハ只一騎と有り鎧を合せて逃ぎ治長河内
のくひうき切御本陣にたてすはるたまは首をとりて
さりしは後尺志くく人あつて河内くくひるるや
けまハ治長 大君の御前より音まきこし七市お馬の首
まてらひしものをそのとき入るみさりしる口にまき
と中まき最初敵の勢関り原より打出しとき味方の物
見しは逃しをせうつて十万余もあましくはちり
かし黒田長政家人毛谷主水を使ふまはる大君
汝いて斗の勢いといふとをうりて尺つまやをぬのみ

主水答へて三万ハよしはまきしるしとせしる摩忍の
事をやりの心と仰らるハ自由は敵もうりをは
至て用しかりき難兵原よりくしをぬとち大君を
ししちやたりとて御菓子をもとる退心しそのち
あの者も苗字をたつとさりし事残念なりと仰せ
けまハ御側より若あつて彼者ハ毛谷と名のりい
中より大君いやくそまハ毛谷といふまはるる名
せしものちの姓なるしと仰けり果して本姓を
田原といひしとそ又藤堂より湯澤に助る首献
せしとそ免登々と宣ひて血洗をせし御らんせむ

ゆゑ果して免登なり。大君他家の小臣よりよく、而
見覚えあり、幸不思儀なり。人皆中あつて、黒
田細川加藤田中、石田と戦ひて、勝負いふところありし
折より、京極藤堂織田の勢、大谷を破り、勝りのりて
あつて、まきより左右より、けし多ほよ、敵のたをるべ
ちり、よなり、蒲生大膳北川十郎、島左近、伴新吉等
をばし、め甲首百三十枚とあり、蒲生備中、今ハこし
まてなり、死の程し、てまきの目をかゝる、うらん、とき
自勢引具し、喚ひて、うゝ織田長益、かき、た刀
鎧さ、よきて、身を通る、はされと、乗る、馬を、よ上つ

て、よと、おち起あつて、二人、まき、切り、さけし、所を、長益、を
う、さ、は、家人等と、鎧、め、き、ゆ、は、て、突、殺し、三成、ハ、伊、吹、の、い、ぢ
よ、此、入、り、加、藤、嘉、明、を、し、め、て、出、陣、せし、と、を、花、や、り
か、る、物、の、具、し、合、戦、を、し、ま、つ、て、世、の、者、の、鎧、よ、き、う、敵、を
ま、き、ま、き、を、し、引、ひ、て、ま、き、逃、出、せ、し、退、ひ、さ、り、智、恵、深、き、
志、つ、ま、り、を、し、黒、田、長、政、の、屈、竟、の、侍、十、余、人、を、く、つ、て、逃、
今日、の、軍、よ、石、田、勉、を、生、捕、へ、し、て、ま、き、を、う、は、し、と、い、ひ、と、る、る
敵、逃、る、と、し、逃、う、け、る、只、長、政、を、せん、や、う、を、よ、と、て、石、田、の
敗、軍、を、あ、ん、と、その、や、う、伊、吹、の、禁、を、よ、て、逃、は、め、し、解、て
の、ち、勇、氣、は、し、る、と、を、い、つ、ま、ひ、か、う、り、き、島、新、吉、よ、二、人

才あり軍やつとてのち母と共山中よ志のひまむ事
十年もろく困窮まきぬ朝夕のけうき紅兄才ひそらみ
もろくやう石田の一味の残黨をくく免捕て出るものよあま
たの褒美をむりつとそりつかり今兄才の内一人命をむ
はろくは母上やしろく之き事やけろくんとそり弟
せしよおひてとらをもよるんと云兄母もむろく
弟を奉ふやういぬ石連てゆきいとけをろく駿府の
市城下よ年くおまは山中よまむ松子そてら島た近
ろ子をいそつて生とろいとや出つ候て弟を獄とそり
おめろ色兄よ市褒美をむろくぬ兄おさひ子足ひそ

く妹母のりそろくやろく毎初獄のあしりをさむよひ
ろろく番人よ足とらめら色繩をうけて引出せよせし
ちく者のちろく白状しとろくををさむと一
とろく大君その孝義をあそりしぬ兄才の命に
けろくせんとも母を市城下よよひ連てさせ一代杖持
をあそくむろくぬ本多忠勝井伊直政小西行長と戦い
相引ま引ける三成の敗軍よ至て小西の先陣向のつ
ろくさつをきたち行長下知しそか引さろく陣とそ
直さんとす所を右往左往小西の逃るをろく取てけ
追迫るほとく詭左往左往はぬ逃深小西のつて大まの

上げ者も久せとよきと耳しうけはあわけハ
小西今ハせんりさく身ひらふ成て流るせら三威ハ
軍法を志し秘も叛逆の企ありしより金旅を悟す
大名より浪人金由味方と付し故その矢先きをらふ
さうく味方してきし死あひししく行長ハあ
くすて勇氣者て戦場ふる者る色あよく
くして侍をくしに叛逆の方人せしよりせん
金旅をあつめんとしけらより大事の場所に至て
命をまてたうふ者なくひら崩ふは世に世の
笑みのとらりユクこのときてきこく敗北し

ぬ唯鴉津義弘のそる人をくめてやつしを
小早川秀秋大軍をまめて迫りつゝ義弘も命を
たうふてうち退けしを自勢しきうち死多くて
こはる五百騎をうりまぬ義弘むけはあゆんし卑
怯のこさとして鉄炮の是うな前後をうしせ足緒山を
さるとして福島陣の前を馬をさつめて落てゆく
刑部少輔正之^{正則の子}六斗を逃りてサヤけし久酒井家
次陣よりサヤサヤんとひしめきを味方たしき
まめそ前後より取込め中務少輔豊久の首をとる
の弟家久 義弘のこをアて最期のいさせんせしと家人

阿多義淳義弘のつゝ馬のをもるをおし向けおち
させその身バ少くあり主よりつて討死しつゝ義弘
のけ曹みりつて暮ゆくを直政きつとんく馬を
たせて追くる忠吉卿ははききて追うけめ直政もま
てきの鉄炮を聲を打て馬よりおちおち引返り義
弘數十騎の進習をたると山をここまらう道して
大坂にはき妻子引はき舟よりつて薩摩よりぬ
かくて味方の勢も諸方の合戦もあつち血をまきつて
咽をうたふしこちを分てゆく敵を退けけり
首四万をくりその余はる山く谷くまかれ捨

武器馬具兵糧のふい野もち川をあきき味方のうち
死にこつち四千斗し未の時軍をたたり諸大名も大
君の陣もあつて勝軍の陣よりぬいりつちの時
大君は曹をたるとしつちしよ傲りて諸大名
向をせし勝て曹の緒をたむるとも此事なりと
ゆつこき忠吉卿直政も疵あつち供しして
陣もあつち大君直政の鉄炮の疵あらんあつち
つち茶をばけさせし忠吉は事し相伴せよと
てあつちり玉りぬ中納言秀秋裏切りつちり
谷をかきして陣もましつちりしつちり使を

人々亦まこそ宰相との裏切飯がふんがとしいを
せしうは禁陣せし三家等をしめておそくころ
ひらう大坂方負色ふなつて七旗本の侍の曹しきん士率
ハ弓鉄炮打きて見物あるのそかり秀元やうて林下の陣
中の使者をたうハ―秀元この山より馳下ろくやいと
きて先をうけいぬるぬる人こたがれて軍せ
ん株がし方く勝をうろくアといもやうれ
禁の陣中さるき立てちりくさるされと秀元退け
んもせみ池田淺野等の陣より南宮の禁さわき立
をえてとつとかけよせ分捕高名をうけい惠瓊

ハ京都へ逃げ盛親ハ大坂へ逃げ正家ハかの本城水戸
飯秀元ハ今度の合戦ハ大層對しなりとさ
せう切なきまより安きころ候るし吉川廣吉使者
を黒田のりまほりし秀元いそき内府の御本陣
をせすいそき所嫡家中納言大坂より在りハ義
あして秀元一人先とつて見系を之に振るしあ
祢て多きまきそりハ内府の御前よりきよ成
へしといもせおき物の具とらあきめて引さるる
是日西尾豊后守光教津輕左京亮為信等をもみて
大坂の城を攻む松平丹後守康長をもつてむらじ城をうつ

鉄炮おひくくく打つけて二三の丸を攻おとす十六日秀
秋の勢佐和山の城を攻む十七日脇坂安治子息淡路守安
元と同じく大島より攻め入り分捕高名しけし
味方こそははくきこくく入り右田隠岐守晴成
^{三成の}同左之助重成兄^{三成の}同右近大夫朝成の子同隼人正
重家^{三成の}宇田下野守頼忠^{三成の}枕をかくして自殺
たり大君三成の行儀さうかうさう故子田中吉政
修せて逮捕せしむるをいお残黨くくめりて多し
考よち多くの侍褒美玉り多ししゆれし
福島正則黒田長政池田輝政淺野幸長^三京の守護

うけたるを四方に閑所をもく法度をまきしして
乱妨をせしむるを農工商賈安堵のゆゑを
十八日大垣為主兵の諸將相良秋月高橋垣見熊谷等
降人を出しよんと関ヶ原合戦より以前に地方人伝へし
事やかく依て皆本領安堵せしめし福原右馬不
のし終る士卒をあはめて橋本丸をくくちりしは
西尾光教矢みを射て道理をさし右馬こしを
髪をきり城をくしてかちぬほとなく切腹作し
先達より山田入道道阿弥景友^三福島正則の舎弟掃
部頭正頼が加勢として伊勢國長島の城に居たり

原田隱岐守とたむしう上方の軍やつとめとまて
入道も勢三百余人ひき具しとあり領大鳥居がし
ころととき長束正家の名もよく行合ひあつた
らして首級百切れて又素名の城を押しセルも
城主氏家内膳正行廣城をこして逃たり又龜山
向ひ困本下野守憲光の城をけり又神代向ひ羽柴
下總守勝雅の城をけり取てうづめこの入道は智恵さく
口面白き人あり大君の御あつるをくこころ事え
やしとておとよ市目をかけ玉ひしほとよ外孫譜代
の人入道の家み出入せぬ者なし三成うる起りし

より西國大名の内々御味方の事きとめしものころ
弓矢取て高名せし事ありをきく明智の乱にうづ
催促も随うし勢田の松切をぬし大君の御供して
道の警固多し伏見の城をこし舎弟甲賀左門南安村
死をとけりうづめ今度の勅賞も大名の列に
加く玉とんと思ひし後日近江の内にてはく五千石
玉りりしより入道案に相違し疾と称して出仕せ
せ或人此事をなげきやせしうら大君氣の毒るん
市氣もよて道阿弥が不快尤る事るれとくむ井右
を以て家康もきりんをとらりものこから人を一國に

主とせハ辱つゝこの仇儀世々行を色天下のこはら
ひとかりもやせん家康景友一人ヲ怨らるゝとて天下の
た先まえぐさしと作けをも本多正信亦そいふ考て
有るまき市淀し大内今川北條の家断絶さる事階
おこさるるなりかりと中々とい 大君えつが
入しゆいぬ入道此事をてつゝまてかまて入て病いえたり
と披露し出仕しけしハ市籠愛をいめさるる人ほ
とちくその子新太郎景本ハ奥州古くさるる五一万石五ハ
度長九年二月入道六十二才して卒を新太郎の初め
る かりしハ実父主計頭ハ所領半をわけて迹をつせし 長束正家
水口ハ飯て盾こりふんとさるるも一人ハ催促ハ隨を以

大君軍とさし向けいぬいしは正家さるるさるる妻
を以て横谷ハ逆あししを味方追迫りけしハつゝ
ハ自害もハ西行長ハ只一騎とるりて糟川ハおちあふ
けるハ林藏主といふ出家ハ人とうめさるる者ハやてハ名
のまて繩うけよさるるハ林藏主自害をさるるめらるるこ
こ吉利支丹の教を仰き自害をかくさるるまよと云
こよりせむるハ繩うけて献すハ林藏主ハ金百兩ハ由
るハ石田三成ハ山中ハかくれしより木の實をひろん
飢を志のく事数日ありて一斬の百姓家ハ宿を
を以て追捕ハゆはまといしとまよしより腰かへて

河辺を以て秀頼公を守立らんとせんは宗茂を以て
大坂を以て城を指籠めて一軍せんと思ふに宗茂を以て
送りけむは家定は於て大坂を方人せんを關東に志
たりをんとし俄に決しむるに宗茂は宗茂を以て
とて館の門立切て再び使を命じ宗茂ついで大坂を
ゆき毛利中納言を使として身は定めて新橋しめ
らり一方の大將を宗茂にけむとてしむるに宗茂は
宗茂に評定の上まで返答を及せしめて使を以て
する宗茂大に怒り今日に至て何の評定より及せしむ
るか日本國より天下の者も命を及せしむるに宗茂は

飯田の用意をなす家人を以てしめて太閤の恩毛利の義
もむくひ多し大津の一戦を事なすにぬ此上を
關東の陣に降参りありて家國のたかくさふんやうを
あふしとて宗茂を以て宗茂を以てしむるに宗茂は
此陣に降参りしめしむるに宗茂を以てしむるに宗茂は
大坂より宗茂を以てしむるに宗茂を以てしむるに宗茂は
を以てしむるに宗茂を以てしむるに宗茂を以てしむるに
中納言及びしむるに宗茂を以てしむるに宗茂を以てしむるに
宗茂を以てしむるに宗茂を以てしむるに宗茂を以てしむるに
秀包はとなく心地煩しくなり安藝國にあらゆき

來去せしむぬ鍋島信濃守勝茂直茂の子をしめ毛利氏
に隨ひて伊勢の國に攻入り安濃津の城を攻めし松坂
攻し三成をくり事よむるを憤て先非をくひて
関ヶ原の軍終りて后降参を乞ひ本國肥前より筑紫
廣門と大坂より逃ぐるぬ廿日大君大津より着かり
奥平美作守信昌を京都より送りいささき所司代をく
つとめさせし加藤善左衛門三次板倉四郎左衛門勝重大久
保十郎勝長安助役となし加賀中納言利長の青木一短
再び賊と一味するを怒り軍勢を乞ふて人質を以て
危くのなきりありありせしは利長降参をゆる

かりありありして人質をばさこのり大津の
驛よりして陣を築くも勝軍のゆ悅をのりしけ
し大君市威斜るる秘へるる上意考りて舎弟
の侍従利政いふよりつやと問らせしは利長たそし入
てうせりはみちひんやうりし一命をゆるせ
りしとや大君すまじ故大納言臨終よのそみて
市事兄弟のりるをしくたのめやうせぬ市事忠
勤をくしうしかうの侍従罪ありといはし一命が
るはと作らるる三成一味の者とし誅伐のときも至り
利政一人市ゆりしを昔に官位をけつるをいひ

とかりし今年一々年の年貢所持の財宝の多くは玉りく
ぬ利改浪々の身となり京都まで卒去りし若君秀忠は
目籠りて関ヶ原合戦の勝軍をさうせめし夜を日中
はきそ廿一日大君の陣はきあふ日限とせられ関ヶ
原合戦うけ合玉を称し大君以外のお市立腹して心地
煩しとて見集をあらしめし若君決死を退せし
あふ市信志と申しし神原本多大久保酒井がんと
市目通と出んとせしは井伊直政とあふせし苗ゆきせら
る直政信せのむ道をとくはたしてのち若君大君の
軍の助けをぬ事かりしその答わらうと云

いつも七思も入て一向の返答も及るは退せぬは
井伊兵部本多中務神原式部を三傑と稱し中務
井伊の威勢よりとき盛りて内心はおのむ君忠
吉卿のひいきをせり酒井^{備後守}忠利^{大進}を志
して安らぬるふちひ一人あふそのころは直政は向
若君合戦の期はかれあふそのよしする言あふ
中ひきせは大層とさのり答めあふあふそのころは
理非の事はきかうしるく市はち頼しとて見集を
あらしめぬを口惜しと申し市はちあ君の事あめ
中ひきせんといせんしてこそ等々を答もあふ

いふそやといひ直政さもいひ若君の事あやほり世の
ものつらむいともう玉はんの口をしまきつらるるれい
くをもて若君むかりとまてて忠利氣ををくさるる
若君の谷ありて大層の御きんあしくえよく執る
もろい御口の職かりそ色ふ今御陣中あやまき風
吹もろまはけこそおのれ負子肩をりは毒煙の口上
今一言うけむいふんと刀の柄よををうけてまきみうら
あり今よんこおとろきそ引つけ退出させらる忠利
はあふらう信濃駿河の合戦は武勇のほまれを
とこしけるるるのあふらひはそれまきしうらと

人皆感しあつた 大君若君も實に御貴美ありこの
と年しやせりはく三千石領しゆるる明年に至りて一万
石よるまきし後年加増して三万七千石よるる
天下の政事は初め嫡男讃岐守忠勝ハ名臣弗と
いともし人今若狭小濱十五三
千五百石余し 本多上野介正純大君の御前
に年う父もその 正信若君の軍師とらうて真田との
御合戦をまきあうてまはけりしとらけいゆをうら若君
関り原よおらもあふ事ひとよは事より起りり一を
正信おかりき御若君作けらる若君はあやまらりのみ
きよし天下の人よあふやうしとまきし

大君その後よすせてやうやく申怒りつけさせよ若
君のよろいふきうるく正純の今日の一言生座より
色しと付け色い正純したく息して御前を退せ
も安藤帯刀直次これを見て上州正純行末あしう
るしかの父に罪業をせり自悟の氣色あは
もたう危しくと云けうほきく加増して三方
二千石とかり人直次に向ひていふ危きやとなし
まは預て危ふくましとふ若君世をきりしめて
まは、重く用ひまひ下野宇都宮二十万石を依り
人まゝ直次をかりしアムとを今こゝ危きとをい至

アぬといふ幾ほとるを忽ちふ罪業ありて同國由理の城
まう正純寛永十四年三月つひに配所へ死しまう
七十三才 人まゝ直次先見、正純福島馬下知をきりて
浴中の根藉志ためん、正純都よのりう正則の使の侍供、
かろをそ退せく、正純日の圍の関をくるとて番の兵と口論
まらふ事ありし、正純正則は退行候のり、正純終るのみら身
のいと由玉りり引之して、正純の兵と戦ひ死せん、正純事
のやうをや、正則馬打立て、正純をまて、正純以のか、正純氣
色を換へ、正純やあつて、正純のら、正純街を、正純世主の使るれ、正純と
取を、正純のん、正純う、正純身、正純の、正純を、正純を、正純の、正純大、正純勢、

向ひ戦ふて死せんすと思ふ神妙の至し正則思ふ細
ありこそよと随ふて余れとて都より引具しみの侍をせして
汝一定死せんやと回ふ作ふ及ふ一まきと暮ふよし
さしおをまきと腹切正則身汝よりうつて徳川殿よ
里々の閑守せし伊奈圖書々をひ取て汝より
をのをとそへひぢかきし伊奈ももまかしく正則
侍伊奈とのようみす一死するあつと腹きりぬ所実
檢のしめり死首を余れひる其ころをひるくんと云
伊奈その使ふ事のやうをまき我身の考よとてすつ
かぬ事ありしとわけしめて知てりう作うけむり

ぬとて使をい返し井伊直改の儀しと番の兵六人首
まうつて返り伊奈の先
足軽大将正則ゆりく怒りよとひ首に
とこよと返して凡天下の人貴ある賤ある貴く賤く同
くぬるやぬれらこ道を志しゆく正則侍のそ
余せしむるむす所のくひいこもく足軽の兵とそ
んそつとそのお尤いしとぬれをせく正則身不
肖よは侍ととも徳川殿の味方として侍せをうけ
徳川の微功をあうせし事一全く正則一身の御
らに家の子郎當の命をまて身をつらんきうお
よりし所し然も今正則侍を以てそのもよふ属せし

是くも準せしれしなり。正則天下に控て面目を失ひ平ぬ
又正則々多しせし所のくひは只一つしむくひ強りたるの
首の多き事をのそむくは乞等々くひ玉もふん
事その詮なし速よりし年よりすくも中らる井伊
あつしをきて大よかともき正則の宮ふ所こともるに控
せりささるハ伊奈うもよ属せし騎馬の侍う首まうつて
年々せりん伊奈と中直う仕むはん事公私の大由
何事うかまふもきんやとひけこハ正則家の子郎黨
ようともあつてかすれてをうくしき軍せん事叶ふ
今ハ徳川後も正則より思ふし此後南門下

と伺候せんり詮なしとえ引もくもく伊奈せん
るく切腹や若君はよし字もこしく正則をうへ
あふ井伊兵部本多中務松平下総守ハ池田福島浅野
黒田藤堂有馬とせり軍勢引て大坂より毛利
増田使者を陣中よせし降参をせしめしれん
井伊お返言及るハ廿三日大君若君も足氣をあげし
あひ軍の法も碁をうたか如し細きせんをさか
らん盤面をえりして勝敗をたかりし今度の
井てのり事目をも所を美濃尾張のあひし関原
も張本の三成等とやあつるハ國々の餉黨をう

くそびしてちふへし事の上田陣せし時此事
中若ハなりりしやととせむハさんハ田一西今
作の通るやていと事ころあつやうて田左門を
さし身通るひくき者ハやるもころあけらるぬ
今よりハ汝ハヤヤ用ひらる移してころや
と作らさハ一西あやりのうれハさハ涙をろし
て退きひ今より五千石領せしハ大津の城をさ
らも明年よ至て近ハ内三万石玉りハ大津の要害よ
ろしころぬそ國その大名に修せて膳所の高城をさ
はくせ奉行八人つけて夜よりつきて成就し一西を

今この國大恒
十万石ハ
六の日奥平信昌治中不存て安國
寺惠瓊を生捕る廿四日若君京都よりりり毛利
中納言大坂西の丸をさけて木津の邸よりはくそ入道
して宗瑞と改めさし使者をさして降参を
ころ増田長盛ハ高野山に逃入る大君数日のあひ
大津に陣せし親王方公家衆より使者又ハ
ころころきころひて事ころころのあひ畿内の
諸役人豪家の商人又ハ大社大寺のころころ献上
物して事候ひやころころ送せさささくハ文禄
元年の冬本願寺門主光佐寂して嫡子光壽と

法く^{上人}末子光昭の毒母白もせせしむる光
佐の没后太閤は身をまうせり子を門主と立んと
乞し太閤光壽を押しめて光昭を門主とせり
^{順如}上人 大君奥州に向ひあふとき兄弟二人もにた
すいり市出陣の所いとあはしせんときを三成途中
てさきより京都より光壽又いそより京をさあしむ
小ちより江戸よりいそいそをさけりつるなる
て三成大に怒りめ捕んとし光壽より身をば
きりしてあふりつる大津の驛より来て勝軍
の所悦を述し太閤大君初んころりてはりあひ

今度賊徒やふしし事 和僧をかして仕合せりりと
てほとなり本寺の東に一ヶ寺所建立しれ東本
願寺と名付本寺同格に作付し光壽嫡子なりとハ
中ち相續をいさ者なりと光昭は太閤より門
主とせしれし上て兄弟ともくは宗旨をばりせと
りさるるまとして天下の末寺門徒をばりては
けり西流東流いそよりしするこの日市下知有て
再ひ伏見の城修をばりせり廿七日大坂よりあひ
あはれく西の丸よりあひしり諸國よりあひ
あひすいりともいそより多くして所より三成の市人

せし軍ハおそむしかくまはるし京極宰相高次の大津小
盾こりらととき 井伊直政并おの舎弟侍従高知よりふ
早吉を立て御方人たる一き旨申入る 大君ハ遠州
中泉まんのりり多しして高次ハ早吉の旨申るに御書
玉をりて志神妙のほよを賞せしむ賊徒ちりき内に
ほろふしは色ハ大津の城よりちりきき吉作つるを
かくて高次に淀後と興山よきめりし城を敵より
してのち 大君の御書到来ししは関ヶ原より上方
に勢ヲつけたりとす後悔えよ立るく 大君西の
たよ入せめいて諸国よりゆらるるをせ集るといへ

高次の面目かしくとて幸よくさむし御使者を以てる
高次城をちりとけさるるに内府の御前よ出一きね
ちしとて再登の御使も幸よくゆるし井伊直政を
はらハさむして御迎てき地よありとて一人は味方とる
うしを巻るるを城を数り守つて関ヶ原よむく敵兵
さしし事忠勤莫大しと申送るるよより高次收て
井伊と共に幸 大君御ありしむしめ異うる
九鬼嘉隆罪をおろしと 堀内安房守氏喜と紀州新宮
よ逃入る和歌山の城主兼山修理亮一晴新宮よせ向て
攻下る嘉隆の子長門守守隆大坂よ赴き 大君よ

見系し池田輝政に告ひて守隆の勲功の表にヤク一
父のくひはらん事をうつふ事ゆきしうらうらなは
輝政又福島正則とおたうり重祿て二人一所ちけき
中さふさらばとて嘉隆の死刑をちめられしとて
守隆よりふるまひかきうらうり候て父ももと使いて
此よしをばせける嘉隆うらうらとて死し
たうらとて無怒られし此九州に於てと豊后中津の
城ちうら黒田如水一方の軍勢を僅し豊后ろる三成
の一味の城主としを打平うけんとい上方の勝負をゆつて
こそ軍をかこしめると諫し者ありしうと如水

あてにほろいそ道に日和んとつふものなりとて此
ひよ出陣を折しし豊後故の国主大友義統去る朝
鮮の合戦に卑怯のうらうらとて大岡に没収せられ周
防國に落ちたうしを三成金銀あゆみ送て事成就
能治の本領をちうらとて九洲にうらうりて軍
起しとてそのうら義統よりとて豊后にせしき
けらも如水知て書を送る道理をさととてといしと隨
そいむしに浪人ともさして立石の城に立てり
同國村築に細川忠興の領地とて立石ともをせしと
七里ほとへとてなり細川、苗重、松井、佐渡、豊長

早うらむ以て如水と清正とふかくとはくはしあらん
義統を杵築に乱し方々を松井佐渡出むるを
てうらむ(けぬ)所は黒田の先よりけ合せ石垣原の合
戦に大友の勢を破り如水の本陣をこえはく(き)立
石の城攻んとせしう義統おそきて降参せ後日(き)至り
大君義統を常陸に退放し(き)加藤清正(き)小西(き)宇
土の八代の城を攻おとさんとてきて(き)軍を出せし(き)松
井(き)早(き)到(き)未(き)せ(き)し(き)は(き)杵(き)築(き)を(き)き(き)く(き)は(き)ん(き)と(き)豊
后(き)も(き)ふ(き)途(き)中(き)も(き)て(き)如(き)水(き)の(き)使(き)者(き)の(き)行(き)あ(き)い(き)義(き)統(き)降(き)参(き)
し(き)ら(き)と(き)て(き)石(き)垣(き)肥(き)後(き)の(き)宇(き)土(き)の(き)城(き)を(き)攻(き)め(き)し(き)て(き)如(き)水(き)を(き)す(き)す(き)

んて豊后の安岐をせむ城主熊谷直棟は大阪有て叔父
かり外記留主を守り如水井楼をく(き)立(き)城中(き)を(き)見(き)下(き)
て石火矢おつけ又亀甲車もて石垣はき(き)し(き)攻(き)太
鼓(き)の(き)お(き)と(き)大(き)地(き)の(き)う(き)ら(き)ひ(き)城(き)中(き)を(き)ん(き)き(き)し(き)追(き)お(き)し(き)
返(き)る(き)忠(き)の(き)者(き)あ(き)り(き)て(き)城(き)の(き)火(き)を(き)お(き)け(き)裏(き)切(き)せ(き)ん(き)と(き)中(き)送(き)る(き)如
水(き)の(き)う(き)ら(き)ひ(き)して(き)城(き)中(き)を(き)ろ(き)ろ(き)裏(き)切(き)せ(き)る(き)不(き)忠(き)の(き)者(き)し(き)
その上火をうけては焼死せ(き)る(き)者(き)多(き)う(き)し(き)て(き)矢(き)の(き)お
を(き)以(き)て(き)外(き)記(き)の(き)道(き)理(き)を(き)さ(き)し(き)城(き)を(き)あ(き)け(き)し(き)は(き)一(き)人(き)を
殺(き)せ(き)し(き)と(き)り(き)き(き)ら(き)し(き)外(き)記(き)よ(き)ろ(き)ん(き)て(き)城(き)を(き)お
め(き)し(き)その(き)お(き)上(き)方(き)を(き)して(き)逃(き)上(き)り(き)ぬ(き)如(き)水(き)城(き)に(き)入(き)り(き)熊(き)谷

侍とよきことく知行あつて死ししころ外記
ハその後直棟といふく死したりとまうて又下て如水
身をよせしむるはしむる事とし知行あつて家人とるは如水
又さきみて垣見家純富木の城を攻るる安岐の如し
苗主居の大將寄りの陣に初うちをけししを如水
事ろくちさうをけあり家純ハこの時美濃の大將
にさうら士卒の内は近頃の若ありしを足咎めて生
捕きありしころ如水はささと縄をとちて城に入
たり城中をしめて家純死ししころとまうて降人よみ
はて出た此若初うちをけありしはしむるはしむる若

ありしころ如水打りしむ味方迫をいざまて迫せし
味方ハ迫るハ五分五分の事なり軍の上るハ地をえて
人をいざまぬ者ことと城中の侍のころと又知りあ
たして抱げりハ固の城主中川修理大夫秀成しめ大友
二方人せしころ頓て後悔し軍兵を出して臼杵の城主
大田飛弾守一吉とたしむ勝負を決せし如水来て
中川をさしむ一吉ハ道理をさしむしハ一吉腹切て
死しその余ハ降参り又角半礼をし攻りしころ時
原の注進目しむきしむるはしむる國中の諸城より如
水とて豊后一國平均せしころ毛利中納言の大坂

のほうしとき侍大将村上掃部能島内匠下知
舟の勢をひきて伊豫の國をさへせらる世に伊豫
真崎の城主加藤左馬介嘉明ハ池田福馬等と海道
の先陣に向ひ舎弟内記忠明兄に代て城をとり佃四郎
一成と云郎黨等後見せり統州の勢を嘉明の苗を
とばとてこふ押とせ百姓も一揆を起してこふを
一味を忠明の如くあせき一成の思慮のさうり事を
もつて夜るよりせもの陣をおそひさうりつゝ掃部
うらひ切てけさハ統州勢大に乱れ内匠も死し
一成又一揆の娘原と戦ふて志より破れその文も痛手

三ヶ所まで引きてはひま立は事叶はぬ統州勢
又一揆を集めて城を迫りけるは忠明あせき戦ふて
勝負はるゝ一成齒咬し此痛もさうりむるしく床
上死せん事うそも助るぬ命あるハ尸を戦場
さうりんとて疵を志うと巻き老人小供をほとく
て小山のりや旗さしりのおひさうりしく持てた
王守のさうりをあて加勢の大軍あうりしとあひ
さうりし色めく所を一成もうらひ切て出あうもの士卒
をかり立てさんくハ打破りあうりてきを演じ返つめ
けさハ藝州の勢舟を争ふて本國に返り一成又一揆

を弁らけしほとり四国わやうなる嘉明これを
きくは深く一成の功を考ひ此人朝鮮の軍しほひて言
名しみの國れ人目をかゝるし此のち元和の合戦に至て
七年老てまじく壯るんと云東國は控てい上杉景勝
大君上方のむせうを幸ひよ最上よあけられ
腹いせをもて兼續直江小四万の軍兵をこらひて出羽
弁せ最上の一族皆殺しにして凱旋をこらひし下知の
最上義光かくと波より大みおそれ廿五ヶ所を砦を
かゝり上山より幡谷までほけいり兼續も勢に幡谷の
砦をせめんとほいさふ又隣國大寄の城主伊達宗政も

ハ最上義光の姉なりけりされハ親しき縁者なりしを
年々この堺目のるより争論起て合戦も及ぶあ家の
間快ようは是に至て義光二男駿河守家親を大寄の
はかりし所と義光とい近き縁者なりしを
内府の御下知を上げ上杉をあせく所より大軍さし
向て危き朝父の迫りぬあはれ日ころの怨を
て当家をまじい高名をほらるしあ
家も滅亡せんよ控てきてき勝上のつゝ大寄
をそ向いしめとくと思慮を欠くさうてい
もせけり改宗一様も及らけひき四千の軍兵を

家親も志ざりいせり義光も加勢させしはから一万五
千の兵を引て志せしは、く時子兼續はちや幡谷を
攻めし勝みのつて攻めし廿一ヶ所ありしをせめ
とりらる猶しあゝんて長谷堂の砦も向ふ処を義光
あらまの勢二万を以て後巻せんといへ稲荷山陣
伊達の勢ハ文田陣と長谷堂の砦ハ要害ことと
けをしらまは兼續竹束まらるる金堀を雇て地中
をほりぬりせ井楼をくく向ふ城をきつき鉄炮攻
鼓の聲研りひくまらるる昼夜をこくは城中女らん
能泣さけふ声もあやうくゆゆ守将志村伊豆高

治るる如く防ぎ時々木カ判一開き打て出つ義光
改宗らまをたきけし自負死人てき味方いつまし甲乙
かりき兼續もく自勢をかてあゝりの氏家も火をくけ
乱れしして小き砦七ヶ所ありしめらるる果勝りし
軍兵をさし向け中村式部も命して上山の砦を
攻めせしは兼續しかのりも子属せし穂村造酒上
泉主水を式部も加勢として流るる上山の守将里
見越后切て出て寄手と城下もサヤウ造酒主水之
くいぬらる兼續も長谷堂をせめおとして后式部
と一まらるる上山を攻んと陣中もその用意をせし

たうわる所陣中俄みさるこき立上方の軍関ヶ原まで
打ちけりといひのちけしハ魚續初てかろむし
景勝の使者しほとるく到来しといふ本國引
返のいきよし傳しより軍中なる色を失ひし
魚續思ふやう上方の事をききてひそく逃うてハ
卑怯者としてさうハも言んこり武勇のほとをアせてそ
引くめとて使者を城中にけりし上方のいさやうも
主人景勝より呼ぶひより明朝ひきとるこきむの
名残の合戦はしつとつとせかき翌日とつと押も
一二の木戸を破りて火をけり物にあきれそ人驚く

上げ陣屋を焼くひきけり所を義光改宗城中の城と
迹をたよめて追うけり魚續戦あてハ引き引てハ戦い
二十余合あて戦あて米はまうり此時魚續
米沢を領す魚續が攻とら
せり廿余ヶ所の此若義光も攻て死るは十月
一日奥平信昌仇をうけむりて石田三成小西行長
僧惠瓊を浴中ハ引あはしてへいぢかき長束正家
等々へいと共に六條にさき三日毛利中納言入道
の降系をうけあひて安瓶石見虫雲隠岐因幡伯耆
備中備後の八ヶ國を没収せし周防長門の両國をとり
中納言領て長門の萩まうりされ子息秀就を人質と

年々せらる。増田長盛が所領没収せしめて其身ハ武州
岩槻に追放せしむ。元和の合戦ハ長盛の子兵太末
盛次をむき、とてまはり父子共に切腹仕せし。藤堂高虎
郡山に向ひ長盛の城をけりんとしけり。苗主居渡辺
勘多博吉光をせんとて吉光ハ勇氣ありて
諸人よあめしれし。人より主の長盛書状を以て城を
つけし。高虎がききかたりし。まをりせし。ぬく神妙なる
わらひて城をさし。高虎の才能を感じし。一万石禄
あつて家人とす。大君御使をいそぐ。浮田の所
領を受えし。せらる。國人等ちりく。まをりてまをる

んとし。若かりき。丹羽長重青木一矩兩人ハこころを西端
よせ時々賊ハ内通せし。故所領没収は後長重のそハ智慮
ある人なり。その上関り原合戦以前ハ降参せし。まをりて
されて知行をより。寛永年中より追々増して奥州
白川十万石を領す。今同國二本松
より十万石細川越中守忠興ハ小野木
重勝ハ玄旨法印ヲ攻りてを怒りて。れり。城丹波國福智山
の討ち。向ハんと。新ハ十八日攻りて。重勝ハはめ腹き。せ
り。木下左衛門大丈延俊と。い。姫路の城主木下家定の
三男。小早川秀秋の實地兄なり。太閤のときより父
家定ハ苗主の城を養て。京都の高きありし。うと

近後代友とて姫路の城あり三成ありありてより
近後城をもちて關東志を通しりて途申敵地より
使者の往來の時を以て冥り系に戦かたりてをせよ
忠興子隨て福智山の城せめおとすより所領如し豊
后日出一万五千石玉いほ今同所にて十九日若君大坂所
下向し島津義弘所答めを恐してつるをせん
大君も又つて大國まで九州の奥がれい天下の勢を以
てしるふ人臣のかけを大方かき思ひ隠居義
久入道龍伯もつて親しくしるふ事あり若
くは此大道より市内をかりしるをせられ表向に

島津征伐ありしと内觸ありり龍伯入道義弘と
櫻名を押しめ家人漁田出雲を使者として義久を
知り關東に二人をせん舎弟義弘の所行以てか
奇怪に至りたり内下知を待て速に嚴科の所すま
と祈りけし中領安塔の所教書を龍伯入道にむる
入道大よるい大坂よりつて所報を木んとせし
中一猶子なる忠恒陸奥守を名代としてはるさん
と折る不思謀事よ出来れ伊集院右三郎大
夫入道幸侃とすし島は譜代の郎黨ありて去年
三月九日忠恒伏見の館ありて罪なりきよの幸侃を

諸侯を討つ高堂すてふ軍せんといひしめくを大君
の御はさしひつて事かさまりぬされ此と記す至り幸侃
ら子源二郎久直父らうるれし怨をむくんとそ日向
の國庄内の城と盾より領内以外の外務勤るこれに依て
忠恒も薩大をゆるすつとんし浮田秀家の関り原より
西をさして逃ゆく近江の國は清きしころは供令
途中より多く逃げ落武者少くも野伏も出合ひ馬も鎧
もろくも主従三人野宿をうらむる山中の場穴に
身をうくしけり秀家も身よそふりのとて只守り
刀一振あり追捕のゆはさむしと守てすて平自害せ

せんといけり一人の近習これを留め大死しあそんそ
無益の事なり一先本國の志のい下つてもうり事と先
くしりの業守刀残中うけ難は自害しあそん
はをりて追捕のさしをゆるしあそんといつて守刀をも
うけぬ大君のありとあそんこれに秀家近習の者も
い主なる者としてこれあそんをばかり近江の山中
にて自害仕ていを某火葬して骨を焼る主人の所
敵と形して張本の一人より一最期の杯ありあけ
んため控糸仕てい主人すてまかくなる上某も身
ををり人かまうせとてまきとて証授のいしめ

秀家ちう刀をさつりゆとて献き大君その命をも
助いふし内近習忠以よおしせておこをもよきるいひ
れとて福あをせぬ秀家の姿をやりして大坂あき備
前の諸城をもあけししころとき子息秀規をつこ
て薩大不途あき折やし島津降系の初りれ一生り
の國よ志のひ住りう先達より加藤清正の宇土の城を攻
るいづく戦つて二の丸をのつ取らう小西々別城八代薩大
近けい島津より陸路舟争二々するの勢を進め
清正の出城佐敷を押しせて宇土をさくいんし水股
陣をとるかゝる所も清正の士卒夜らあやしき敵をさ

捕らう清正これを見ては若おとせしものあふししと
らつるそんぞとて火をまきしころたつりけり
只竹の杖一本あり清正にぬせくと悦ひりうてア
道の書翰あり宇土の大將より八代よさへいをこの書
りう清正頓てあひ若雇てその書を八代の城に送りて
らうひびききてさへいすもさす時刻をさう待伏して
八代の勢を并やうう昼夜をこらひ宇土を攻し
を城中難義にさる関ヶ原のよりあやまるまで清正の矢
みを射る城中さへせ又上方よりあうつてをいをも
ゆりし城中に入れし宇土の主将小西隼人腹切て

城を以て八代の主将并水股に陣せし薩大に誓
かくと申より夜の間に逃去りぬ黒田如水は又豊前よ
りつて返し香春の城攻めしをみて小倉をせむ城
主森吉岐守勝信出迎て降参り勝信の子豊前守
勝長の毛利秀包の命を付て南宮山ありし。敗軍の
及んで降参り出け而父子も追放せしむ。勝信
ほととぎす死す如水清正日限を慄し合せて筑後守
入るる鍋島加賀守直茂は其の子勝茂は三成より方人せ
し事をたるとして使者をもて降参りを乞ひ賊黨
少く下いふしし。あつるをあらんと思ひ

立花宗茂は上方より柳川よりしとまて軍兵
をひきかきし。攻方の宗茂をまてられすに
徳川隆平降参りし。領内よりちかてきいその位
を置置しし。一方の大將を命し。境目をたす
合戦勝負を決せし。折るる黒田加賀この要をまて衆
は鍋島の方を使きて軍を制し。清正は宗茂の城を
あさせ熊谷もつこゆりてはみりし。高橋統
増は元宗茂ともしめ三成より方人より大津の城を
まかり新領没収せし。而宗茂は江戸よりあつて
はし中よりありし。奥州棚倉一万石をのこし統増

石出さきて禄玉りり立花直次と改名し元和年中

宗茂を本國榊川十二万石此地よりつれり合同直次

も同國にて三池一万石を玉りる奥州下鍋嶋直茂取

秀包の本城久留米をせむ如水清正城中に使してあけ

るは一き首やから秀包切きて如水と志ししり

久留米を出るとよこい留米孫の大坂を近づきしよ

大坂方より敗軍せしこの城隣國より攻めし

籠城するをぬとよこいより妻子をさし殺

しよきよりうち死せよとよこい如水きしよその

所一國をうけてかめくぬとよこい

よこいよりはよき主將城を如水よりし秀包の

妻子を具して安藝より清正又筑紫廣門を降

糸とせよその所領筑後山下をうけよ日向鉄肥の城主

伊東氏部大吏祐兵衛大君奥郡に向をせよおし

大坂よりさししり井伊よりはよき勢をせ加ハ

る起よりはよき大君御消息をさしよ感し

仰せよさふすよお立んとす所よいらまら病

能床よりしりりやくて三成の軍かよりれい子息左

京亮祐慶今年十一才よりしり家の子郎黨

はけて本國よりしり國よありし家の子郎黨軍

勢を僅し九月晦日飲肥を立て高橋右近將監宮
寄の城を攻めし島津中務佐土原此城を引し
致度の合戦よつひ一度の不覚うらうき伊東の先祖
工藤河内守時信伊豆國伊東の庄に住し始て伊東
と名の時信の六代の孫工藤祐経ハ頼朝公の恩顧
を蒙り後曾我兄弟を殺されその子大和守祐宗幼名
イ房
九右大將家の命よつて日向の地頭職をむいそ子
孫祐堯よつて足利家の命よつて日向大隅二ヶ國の地
頭職を授され致度を經て祐國よつて島津と
かつてうらうき祐丘ハその孫よつて又島津を押領

せしと大隅薩大征伐の時先自をさうて言名し
了は五百石安堵を以て起して致度とて薩大
ハ高家代との仇と大少敵せんとも黒田加藤のすい
可れも形とらうしねぬるやあまを捕こしこす
隨くうし十一月如水清正豊前豊后筑後肥前の軍勢
合て肥後薩大の境りら佐敷水股を押しや義久と致
んと致祐度大よらうしを勢引具ししをさうて
如水ハ義久又道うらうし降人よ出しとさうけ
ハ清正とらうて合戦をいそしめ大君の命下知
を付龍伯も又加藤黒田よ向ひて軍せんを所し

大君の所使有て黒田加藤ふひきくつひき昔作ら
されり色い祐慶のそみうしるひ此のち諸國若平よ
敵し伊東の家まき今世ま至りて遺恨を思ひ家
中年始の礼子島津のうらむ忘れぬよるをいついけ
忘るしをいふと云つてのちも如れよるをいふと云
黒田甲斐守長政筑前を初るま至りて如水もや
より勝軍のあよりうらむ且大國をうつりしやれをい
大君との戦勇を貴しうつり大方うらむ奏問し
て官位を進り上方めて老やしるをいふまの所領
をいふ天下の政事の異見をいふはありしと作られ

を如水うらむいふまの身すて老て病重く浮世
はあつらふことより更よりいふ思息長政大國をうつり
は生前の礼をいふは老やしるをいふまの事
いふまの事いふまの事いふまの事いふまの事
内々いふまの事をいふて早く隠居しつていふ
まの身の出世をいふ諸大名より旗本をいふ
まの毎日如水の邸をいふ進物影いふ門外出入の
人引いふまの如水いふまのいふまのいふまの
大君いふまのいふて筑前より若君秀忠卿いふ
よりいふまのいふてその志を感じまふ伊達政

宗上杉をあるまじくし上方の負軍をゆつておきしを
つゞく時なれば一攻もほろりなまじしとて福多し
の城おかしし。本在越前繁長といふ所のこの城を
中よりあるも出むくして一戦も改宗の勢をうちやう。改
宗大よかりし上杉家の大将よいてきこふしと思
雪あき折るにほろりて又押せんといひすれ
らしひきくして白石の陣を留る事十日もくりて
湯原の城をせめてあてし打たけて本國より南
部の領内小和加貝主馬といふ者あり一撥を起して花
きの城に押し南都利直をせむといふ教度の合戦あり
勝りしは主馬よりそき。岩崎の城は角籠る伊達改
宗ありし者をそめて主馬よ加勢させ兵糧燭
硝のふを送りつゝ南都利直をそめて岩崎を攻
る事一月あり風雪こもるりししりし
ひきくして長曾部盛親関原より大坂へ逃ゆ
井伊直政よはさき罪をいひ降参をいひ赤佐に帰て
町下知をす所大君その罪をゆるしめり又
大坂よのほろりて盛親毒腹の兄よ孫三郎と云
ふのあり藤堂主馬よりそきしりりあり盛親よ
向い藤堂今徳川殿のゆきをけりし孫三郎あり

をすめられんよと土佐半國を以て承けりしん
はつらつしとてやく盛親尤なりと誓ひ孫三郎に
は先腹切らせり大坂のゆるは事をやれり大君の
市聴は遠ししるを以てのあし氣をそへし所領は
収せしむ官位をあらせり土佐格をかへし真田安
房守昌幸所領の地さししし市陣は多かりし下
知をあらて腹切らんとれ大君は切腹仰せりしん
此思ひるうりれい子息伊豆守信幸井伊柳原は能
父は一命多きけいゆいんるを征へし商人大君の
市前よりさへいふやうなりしけいの家康は許ていふ

あま秀忠はまて入ましきとてゆるりし又あ君の
市前に多うて助命をあら若君市守ををえし
うの上田はわいてい色をさへしつれいそ関ヶ原
に右戦はうけ合ひし父上の市咎をせり世間を
こころいふあとかる事一生のうらみなり老いよめ
すつて切らてわくしきうあまひ父上のあやし
あうし秀忠の命よりいふのうらみをあうし
をえしつらんさるんち等あまひいひせると作られ
を信幸よりて又兩人の向ひ致を地につけ父なる
昌幸はてしつてきとかりし上り市陣は

らまきりりちらんしそれをあひそかりし
死んと祈りし中あつた其うあつた
こそ上田のあひして朝夕使者を遣りし父をいふ
しとき入られぬ幸ハ神原殿も同のあつた又
てころかをいふめをいし一年とる神富家の言恩
を蒙り又順逆の道理しよまてしハ父を引ま
れて四方人仕ての上ハ其う微忠を蒙りし
まておの今かめくと父の死るをいふてま
叶ひは是まの不孝のいしころあ人のあつた
しをいふ父の誅せしころまの其う切腹をか
し

させあつたし序歌の子れ命められし
ちよハかろくすしきまの父をいふ切腹をい
のち序誅罰を蒙りしころころころりりめ
まをいしと又かりいかりり腹切る
ま序芳志をいふてい取てまをいし
おてア、考るるる康政うけ合て房州殿の命をつ
まをいしとて直政とまをいしこの熱をやししは
君と若君と思ふに感激をいししあひ俄に助命の
而沙汰者て幸村と一同に高野をいふ
言聲小形り九年して病死しこのと記東國

の外ハ三成一味のりのあるいハ陣人よあるハ自殺し又ハ
捕らる者あり 大君人よ小市評定あつて罪の輕重

より流罪死刑事あり 天下一統の世とるよりしりし戦

死人よ恩賞の少少あり 結城ヲ將秀康卿よ越前の國

六十七万石 旧下野結城 十五万五千石 下野守忠吉卿よ尾張廿四万石

旧武州忍 十五万石 小早川中納言秀秋よ備前美作廿万石 旧筑前三十三万石

高極宰相高次よ若狭九万石 旧江州大津 六万石 同侍從高知丹

後十二万石 旧信州飯田八万石 福島侍從正則よ安藝備后卅万石

旧清洲 廿万石 池田侍從輝政よ播磨五十二万石 旧吉田 卅万石 細川兼

忠興に豊前四十万石 旧丹后十二万石去年 加増豊后五万石 淺野左京大夫幸

長子紀伊三十七万石 旧甲州 廿万石 堀尾帶刀吉晴よ出雲隱岐

廿四万石 旧越州濱松十二万石去年 加増越前府中五万石 黒田甲斐守長政に筑前五

十二万石 旧豊前中津 廿五万石 田中兵部少輔吉政よ筑后三十万石 旧三洲 卅万石

山内對馬守一豊小土佐廿万石 旧遠州掛川 六万石 中村伯耆守

忠一よ因幡伯耆二十四万石 旧駿府 十七万石 有馬玄蕃頭豊氏よ

丹波福智山八万石 旧遠州横須賀 三万五千石 加藤主計頭清正肥后

一岡七十四万石 旧熊本三万石小西の地 攻とる所十五万石 加賀中納言利長よ能登

をす 本領加賀越中合せて百九万石 能登六ヶ舎弟利政の領地没収せし 加

藤左馬介嘉明よ伊豫の松山を領し 本領真清を

合て廿二万石 旧十 万石 藤堂佐渡守高虎よ伊豫大洲を領

一 本領今治を合て廿万石 旧十 万石 その外 ぐいの加増あり横
津河内和泉三國兵_子近在_をを大阪の支配として
凡六十万石余堺尾の_を要害より関東より
奉行をつ_らい_れ又譜代の_の御家人之恩賞_をして井
伊直改_を江州佐和山十八万石 旧上野箕輪 十二万石 本多忠勝_の勢
州兼名十二万石 旧上総銚子 十五万石 その本領の内 五万石を二男忠
朝_を玉_をり酒井家次_を上野高崎七万石 旧同國碓氷 三万石
奥平信昌に美濃加納六万石 旧上野宮 崎二万石 石川康通_を大
垣五万石 旧上野鳴 三万石 その外 方々の加増あり 大君やうて
秀忠卿を_を忝 内_をさ_しめ_をし天下_を一統_を定

了し事 奏聞し_て十二月後陽成天皇皇大
子良仁親王を_をむ_り 改仁親王を 皇太子_と
立_まふ_の改仁親王_は中宮の 近衛公 御腹_を出_ます_をせ
む_り 主上の御_を勢_をあ_まる_を良仁親王八年_に
そ_をま_りら_しめ_り 中宮の御_を子_をあ_まる_をは_らば_ら 母は中山大納言
これと豊臣大將菊亭右大臣晴季卿と_をま_り見_ます_の負_の
沙汰を以て 太子_を立_ます_をせ_しら_ば 主上の御_を心
お_をし_てこの_をま_り至_りて 大君_を勅_を問_{あり} 大君
中宮_に御_を腹_をから 皇子_を立_ます_の御_を心_をい_はす_の
上子_をあ_まる_をは_らば_ら 父_をま_りく_はら_しめ_り 御_を心_をい_はす_の

川とつ子取陣をとり毎度打勝る事うれし改宗を
あるとつて用心かこころ士卒ハ雀網をり酒めいあり
ひらう改宗朝霧ふまされ川を渡り不意をうち
あつてふけしの繁長逃のひて福島の城を
士卒ハ鎧太刀を打す四方の逃るを改宗追
し首あまたちる須田大炊舟これをもとく猛虎と
登壇陣をとり改宗をせむを置るを撃ち打破
兵糧旗幕のふらふらひら繁長うら巻の味方
まゝるとして木戸を開き打て出しは改宗恐れて信夫
山に逃ちく折る景勝らう軍兵を引て来り

改宗大におとろき昂黨より旗りせむ本より
引るは繁長長義あつて追うけてさんくもや
うり死骸をちをすく改宗ハはた十余騎と小る
あけて白石の城に入ぬ秀忠卿江戸に帰城佐竹長義
宣品川まで出むうこそはなきて上杉の方人せつこ
をひらきしありしにせむかく伏し
のりうてあけきやといふ大君ハ少しむらして
土杉う如く時は急して天下をあつそんとなら英
雄の所為なれハうく怒る及りの義宣事を両端ハ
をばはよき方とて威ううつはハ卑怯のうらみ

事一つとして淹滞なく物一つとして支圖るく天
下をその徳を称せんとす事なし勝重知き
とき僧とかり還俗して壯年より後儀とらざ
るる乱世に形をうら一度し其もの取て戦術を向ひし
事なし切業に武勇の事家人の上りて所司代
ある事廿々年となふ大君心かきらく其まうせし
まふ結城少将秀康卿登議のあり今月もあ
て越前入部ありて北庄の古城を修葺し政事を
正しくし方徳あるともうらをあげ用ひ農業を以
て先年貢運上をもつき恩に感しうぬむし

うハ御境内のものよろこひの眉をひくかくて天下平
均におもむきらる上杉景勝大におろして秀康卿を
治むつとをこす一度となふ大君降参を
うけあひていそきのあり多死もの位下をいけね
ハ景勝生も死もあし知る随せんともく直ぐ由
發是せんともすを家人等あるらるとも景勝を
入居して七月伏刀系向ひ八月會津百三十万石を
没収せられ米沢三十万石を給る論生飛騨守秀行
を中津宮より會津よりして六十万石給る伊達
政宗所内命ももむきく一度も會はとたふし

負軍多くて敵の勢をとり又南部の謀反人よくし
せしむるをいしめしむる市氣色を換し百万石に
市朱印をあげらるる桑脯の本領の内十二郡を給りて
戦勇もむくむく都合六十二万石となり最上義光
堀秀治も加増の地給りその外品に依て賞罰あり佐竹
氏に代り市朱印を給し義光秀治領をぬりて
南部戸沢本堂村上溝口の人と上杉披官の城あり
渡さる者も攻めたり本多正信市前もまじり景勝
市前免を蒙るといふ直江山城守並後々罪三成にお
りりしむる市朱印ありしむる大君いやくよく其

主人のこの忠義をつくりの三成と一味せしむる並
續すお何んも何んも今並續を教さん大名の
内も心ある者出来ぬしお心のせしむるを天下
まよひしその罪をとりて天下をわたん
せんといふに公信ありしむる大量のりとお
まれ智ももるしししと決まらるる還出たり大君前田
の人質を返しし時利長黒儀も及むる母をこしし
おのれこれ大名の人質を返ししめかりしは
利長の養子犬代を返しし續い舎子元服させて市家
号給り四位侍後となり九月秀忠卿の姫君をとり

大久保相模守忠隣所興添て加賀と供して
大君又藤原肅をたも後二人舎後の莖をひき
以時僧西三承兌の朽く一もしてその席ははる
承兌は肅の一旦僧とるう還俗して儒者なる
をよるうこそと肅に向い所辺の学才者なる真
捨て俗となりたる情しきもあつた云
肅はして仙より二真諦俗諦の二つあり儒道の
廣き眼より思ひ世界の人皆真なり和僧の如
君子をえて俗人となり未嘗其れ怪後たりがし
らも承兌こそなる事あるも又ある時承兌西三

肅は向い所辺の博學士なり今も明
國と徳と肅は向い所徳との博學士なり今も明
をきそめあふ一とて肅は執打るうめ和僧
とら富貴をむさるう我は富貴をこそと
る者おあつた是よりこの僧も一席の席を
るう事なきは病と稱してゆいむを給ひ隠
遁の才となりし門人なり盛より公卿方
大名衆より先生とあつた最初石田三成は肅
の名をきいておくさつと一度もあつた聖年
至る関原の事あり此後紀伊國主淺野幸長礼を

厚くしそ振ふるよりおろし紀州をあそびししと禄を
受り元和太平の後四年して卒去り五十九才とのと記
評判されし高き諸大名より公儀に用ひしとて
定めたるもの者多し大君も通て言信しめしと
振きしもの定はて卒去りしもの者多し子息
名ハ冬といふ門人林道春名信勝又
薩山といふ那波活所萱玄同
振杏庵三宅七羊也永遐年等尤も志多し惺窩文
集八巻今の世も行ハ也天子御製の序文ありし
十二月大君江戸より御飯城あつて忍の牧将あり秀忠卿
を御本丸よりししむ大君は西の丸に住みし月

江戸大火十二月岩築三将あり先達より本多佐渡守
正信内藤修理亮清成を関東奉行よりされ政事を
任せし此月青山播磨守忠成その助役を蒙りし
し職も叶し今年京の二條第修葺を仰せられ西園大
名もも傳いを命せし堀櫓天守ありしより廿二條の
城といふ安南呂宋東浦塞入貢せしめ朝廷に於て
大君太平の基をひききし切しなり征夷大將軍
ふるんとて度々御内勅ありししと申傳込あつて
其由は止めし是とて天下の人を將軍宣下の御記
をあやしと大名御家人も退くを止めししと

大君の御事せむ 宣下此事おきす 此は今天下新し
定り諸大名國々せし 軍諸事物念ふして士民
安堵なりうす かくししとむ 宣下のるあは 諸人
の迷惑甚しう 一人の榮耀もほり 天下を
くまひ 一うきとて 入めし 移さく 大に感服せり

公の御事せむ 宣下此事おきす 此は今天下新し
定り諸大名國々せし 軍諸事物念ふして士民
安堵なりうす かくししとむ 宣下のるあは 諸人
の迷惑甚しう 一人の榮耀もほり 天下を
くまひ 一うきとて 入めし 移さく 大に感服せり

